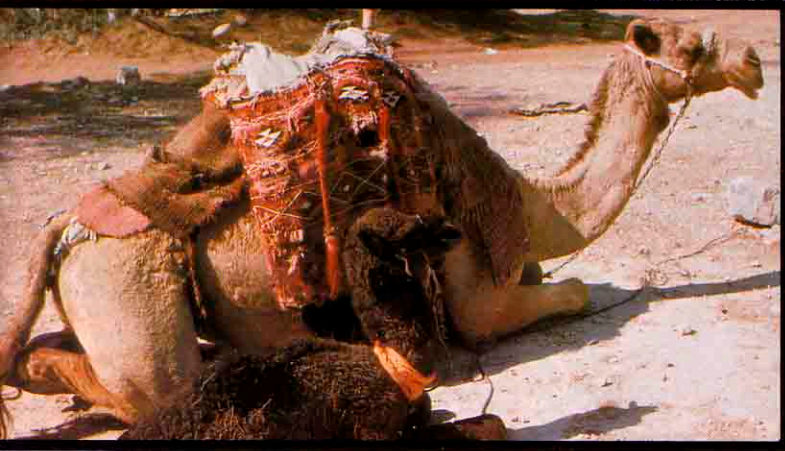
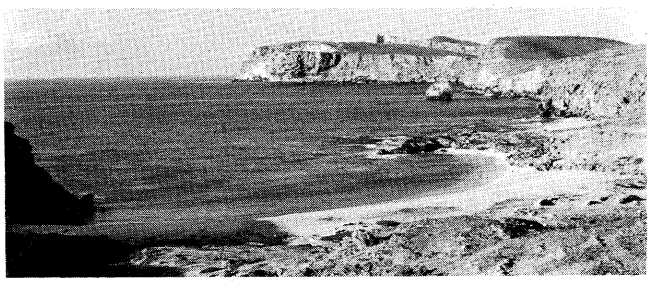
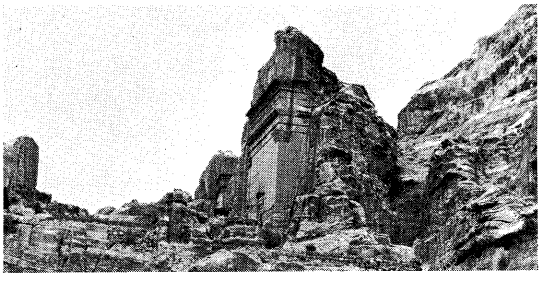
聖徒の道
1977年7月20日発行（毎月1回20日発行）
昭和42年12月18日第3種郵便物認可



聖徒の道 7 1977





末日聖徒イエス・キリスト教会

1977年 7月号

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・スティプレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

もくじ

開拓者は今も必要とされている……N・エルドン・タナー……309
リーハイの道を求めて……リン・M・ヒルトン，ホープ・A・ヒルトン…310
リーハイの道を現代の交通機関で行けば……ジェラルド・W・シルバー……323
主のうつわ……ポール・エンリーケイ・ゴウメイス…325
それしかないんだよ……ジョイス・B・ベイリー……326
アミュレク……マーベル・ジョンズ・ガボット……331
小石のにんぎょう……カレン・シャープ……332
スペイン語の声……ルイス・エスピノサ……333
「なかなか読めないのなら」……アニタ・ミラー……334
重荷を主にゆだねなさい……ロバート・L・シンプソン……335
愛は理解し，助けること……セオ・E・マキーン……340
生徒を理解する……ボイド・K・パッカー……343
ローカル・ニュース……346

諮問委員会

ゴードン・B・ヒンクレー
マービン・J・アシュトン
L・トム・ペリー
マリオン・D・ハンクス
ジェームズ・A・カリモア
ロバート・D・ヘイルズ

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー（編集主幹）
キャロル・ラーセン（編集副主幹）
ロジャー・ギリング（デザイナー）

「聖徒の道」

八木沼　修一（日本語コーディネーター）

聖徒の道 7月号

発行所　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5－8－10
配　送　東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5－8－8
定　価　年間予約1,700円　1部150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

郵便振替口座番号　東京0－41512
口座名　末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

開拓者は今も必要とされている

第一副管長
N・エルドン・タナー

今月はモルモン開拓者の歴史的な開拓の旅を記念する月である。今から130年前，モルモンの開拓者たちは，迫害の手を逃れて居心地のよい我が家を後に，美しいイリノイ州ノーブーの町を出発したのであった。自らの良心に従い，彼らの神を礼拝するために未開の荒野を2,300キロも旅し，グレート・ソルトレーク盆地に到着したのは1847年7月であった。開拓者たちはそこに町を建設し，現在，地上におけるキリストの教会の本部が置かれている。

私たちは，昔の開拓者たちを記念するに当たり，ただ様々な記念行事を行なうだけでは十分ではない。私たちは決意も新たに確信を強め，祝福の基づく原則を支持すべく専心しなければならない。また必要とあらば，いつでも自由を守るために尽くす用意ができていなければならない。私の父はよくこう言っていた。「過去を尊ぶ真の方法は，過去を基礎にしてさらに良いものを築いていくことだ」と。

そのためには，私たちはなお一層神を愛さなければならない。同胞に仕えなければならない。またすべての戒めを守らなければならない。また親として，子供たちに祈ることと，主の前に正しく歩むこと，自らの責任を負うことを教えなければならない。

私たちは，自分自身と自分を取り巻く環境の改善に絶えず努力を払う必要がある。

1940年，美化プログラムを紹介するに当たって，スティーブン・L・リチャーズ長老は次のように語っている。

「ブリガム・ヤングは私たちの偉大かつ賢明な指導者であり開拓者であった。その彼が，彼のこのソルトレーク盆地への到着を祝う記念祭に帰って来るとしたらどうだろうか。夏の盛りに，彼が十分な計画を練り，雄々しく精魂傾けて建設に努力した町や村。その町や村に，作物が豊かに実る農場，青草が茂り家畜の群れが点在する牧場や丘，彼が非常な熱意をもって唱道した企業，文化，宗教面での多大の発展を反映する工場，商業地域，公共の建物，学校，教会を目にしたなら，彼の気高い心はどんなにか喜びに満たされることであろう。とりわけ，手入れの行き届いた，芝生やかん木，芳香を放つ花々，無数の樹木，そしてその中に見え隠れする数千の満ち足りた家々，そこに住む正直で慎ましく，神を愛する幸福な民を目にしたならばどんなにか喜ぶかに違いない。ブリガム・ヤングが最初にこの地を目にした時，ここは不毛の盆地であった。それが，彼の後に続く人々の進取の気性と理想主義により美化され，現在の姿に変わったのである。彼は感謝の気持で胸を満たすことだろう。

なぜ私たちにそれができないことがあろうか。子孫に尊い財産を残すために，勇気を奮い，知恵と汗をもって尽くした勤勉で献身的な人々に，私たちはどんな価値あるふさわしい贈り物をすることができるだろうか。

神の恵みにより私たちは，人生そのものや自分自身の周囲にある美しいものの中に，愛と感謝と尊敬の念を見いだすことができるのである。」（*Conference Report*「大会報告」1940年4月，pp. 129－30）

開拓者は今も必要とされている。開拓者は，他の人のために道を備える人だと言われている。彼は指導者であり，その道の発見者，発明者である。移住者や開発者は彼の後に続き，彼の発見を開拓，発展させる。開拓者になろうとする人ならだれでも，自分が進もうとする道について十分な知識を得るよう努力する。道を切り開く人には，関心，理性，想像力，決断力といった特性が要求される。開拓者は調査し計画を立て，実験をし，そして働かなければならないのである。

あらゆる分野において，私たちは先達の恩恵にあずかっている。私たちには従うべき福音の計画がある。どれが正しいか実験してみる必要はない。しかし，私たちが求めている永遠の生命という目標を達成するには，計画を立て，その計画を実践しなければならないのである。

私たちは，福音を通して進むべき道を示して下さる天の父なる神に感謝するものである。また，御父のみこころを成就し，真理を確立すべく備えられ，この地上に生を受けたすべての人々に感謝するものである。真理は昨日も今日も明日も永遠に同じである。

エルサレム市街。リーハイが悔い改めを説いた所。

リーハイの道を求めて

——第Ⅰ部　準備——

リン・M・ヒルトン，ホープ・A・ヒルトン
写真：ジェラルド・W・シルバー

編集者註

これまで140年以上の間，人々は，リーハイと一緒に旅をしたり宿営したりする自分の姿を心に描きながら，モルモン経を読んできました。リーハイが主の命を受けて家族をエルサレムから導き出して紅海まで南下し，そこからさらに紅海の沿岸を下り，ある地点で内陸に方向を変え，「数多くの艱難」に遭いながら，バウンテフルと彼らが呼んだ海岸地帯に到着した様を心に描いてきました。読者はリーハイの一行がどこで滞留し，どこで船を造ったか，またリーハイに約束された西半球の地のどこに上陸したかなど，この歴史的な旅についてさまざまな思いをめぐらしてきました。

私たちの時代は当時から何千年も隔たっており，地理的にも遠く離れています。パレスチナの山や谷，町，あるいは使徒が福音を伝えたローマの世界の写真を見ると，聖書を身近なものに感じることができます。

教会誌の編集部は，リン・M・ヒルトン氏とホープ夫人に，リーハイが旅行したと思われる地域の調査を依頼しました。これまでヒルトン夫妻は旅行代理店の経営者として，あるいはブリガム・ヤング大学の成人教育旅行学習プログラムの協賛者として，ヨーロッパ，中東，アフリカ，アジアへ何十回も旅行しています。夫妻は中東を愛し，中東に多くの友を持ち，中東の都市をよく訪れています。中東研究の学位こそ取得していませんが，言語，歴史，文化についてはよく研究しています。さらに，モルモン経を愛読し，モルモン経が真実であることについてまごころから証を持っています。また冒険の場面を記録するために，教会の日刊紙「デゼレトニューズ」の写真家ジェラルド・W・シルバー兄弟がヒルトン夫妻に同行しました。

リーハイの旅行経路に関するヒルトン夫妻とシルバー兄弟の結論は推測の域を出ないものですが，モルモン経の重要な要素を明らかにし，アラブの文化がモルモン経中の歴史に貢献していることは十分に理解することができます。

私たちに与えられた課題の大きさを考えていただきたい。リーハイの一行が通過してから2,500年以上も経過している道をたどろうというのである。しかもそこは地球の反対側に位置し，オーマン，サウジアラビア，ヨルダン，イスラエルにまたがっているのである。リーハイの歩みを解く手がかりは，ニーファイが旅を終えて何年もたってから書いたわずか18章の記録の中に収められている。しかもこの記録の主な目的は，地理や一行の経路を記録することではなく，父と，また後にニーファイ自身に与えられた驚くべき示現について記録することであった。しかし私たちはこの任務を与えられ，またモルモン経が真実であることを確信しているので，ニーファイが書いたことは本当に起こったという前提のもとに出発した。神から導きを受けたモルモンは，ニーファイ自身が書いた記録を要約することなくそのまま一連の記録の中に含めた。そして同じように神から導きを受けたジョセフ・スミスは，それを文字通り忠実に翻訳した。私たちが出す結論はもちろん仮のものにすぎない。しかしリーハイの歩みを調べる私たちの旅は胸の躍る冒険であり，モルモン経に出てくる実際の地理に関して幾つかの基本的な結論を引き出すことができた。

私たちがその調査旅行で得た収穫のひとつは，アラビア半島が恒久不変であることを発見したことであった。地理的な状況だけでなく，文化的な面でも不変の地であり，2千年以上そのままの状態を保っていた。ここはまさに千年一日のごとき地である。

アラビアのこの不変性と大いに関係があるのが水である。水のある所に生命がある。これはアラビアの生活と切り離せない事実である。アラビア半島の大きなオアシスはここかしこと移動することはない。都市が砂漠の真中に栄えることはないし，郊外も集落の中心となる大きな井戸や泉から一定の距離以上に延びることはない。従って水の在処(ありか)はリーハイの旅の経路をつきとめる糸口となることだろう。

主はリーハイの旅の時間，方法，経路を御存知である。私たちモルモン経の読者も，時期については知っている。そこで私たちは，方法と経路について理解を深める助けとなると思われる手がかりを，見つかる限り皆手あたり次第つき合わせてみることにした。

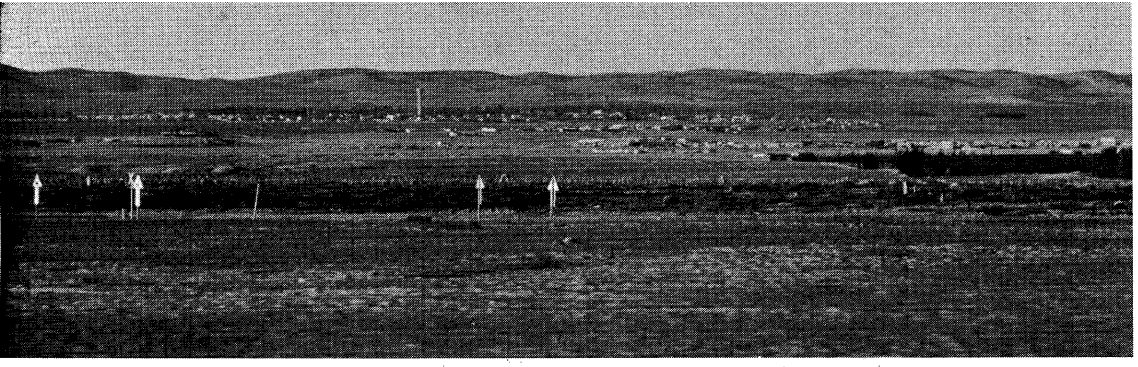
私たちはまずモルモン経を読むことから始めた。リーハイの旅についてモルモン経が語ることを取りあげていくので私たちと一緒に読んでいただきたい。またニーファイ第一書を何度も何度も読み返していた時に私たちの心に浮かんだ質問についても考察していただきたい。まず最初にリーハイが「生れてこの方エルサレムに住んでいた」ということが1章に書かれている(4節)。リーハイは「出て行って」，それからまた「エルサレムにある自分の家に帰ってきた。」(5，7節)(これはエルサレムの外に出て行って，またエルサレムに帰ってきたという意味だろうか。どんな仕事でエルサレムから出たのだろうか。) 2章の中で，主はリーハイに「荒野に出て行くように命じられた」(2節)。(「荒野」とはリーハイにとって何を意味しただろうか。) 後に彼らは「相続した土地と，所有していた金銀および貴重品を」後に残して旅立った(4節)。(なぜリーハイは金銀を持って行こうとしなかったのだろうか。少なくとも幾らかお金を持って行く必要はなかったのだろうか。また彼らの所有していた金銀の量は多かったのだろうか。) リーハイは「ただ妻子と食糧と天幕のほかに何も持たずに」出かけた(4節)。(どんな食糧を携行したのだろうか。天幕を携えてどのような旅をしたのだろうか。その生活様式は今日アラビアで見受けられるベドウィン人の遊牧生活に似たものだったのだろうか。)

向かった方角については，5節に手がかりが幾つかある。「父はまず紅海の海辺に近い国境のそばへきて，それからさらに一そう紅海に近い国境にある荒野の中を進んで行った。」(これは実に興味を引く記述である。「国境のそば」と「一そう紅海に近い国境にある」とはどう違うのだろうか。少なくとも紅海はまぎれもない目印である。「近く」を通る道と「もっと近く」を通る道があるのだろうか。) 次の節ではさらに詳しく「父は三日の間荒野の中を進んである谷間にとどまり，そこを流れる川のほとりに天幕を張った」と書かれている(6節)。(注：これは紅海に達してから荒野を3日旅したのであって，エルサレムから3日旅したというのではない。この川とこの谷を確認することは可能だろうか。)

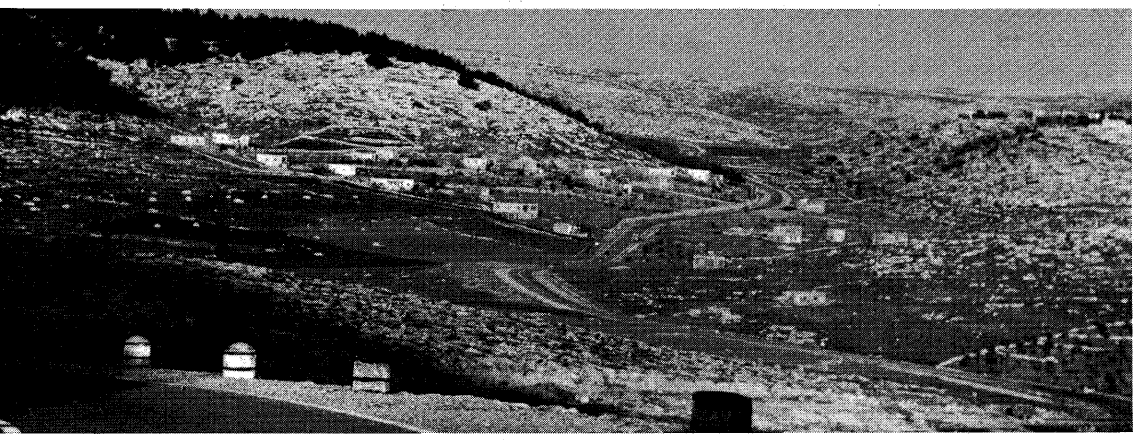
他の節にもっとはっきりした手がかりがある。「この川は紅海に注ぐ流れであって，その谷は川口に近い国境にあった。」(8節) (リーハイは紅海から離れた内陸に宿営したのだろうか。) 彼はこの谷をレミュエルと呼び，川をレーマンと呼んだ。この描写からさらに若干の糸口を得ることができる。「この川の水」は「紅海の頭に注」いでいた。(「頭」"*fountain*" は何か特別なことを意味しているのだろうか。) またリーハイはレーマンに「汝もこの川のようにたえ間なくあらゆる義の海に流れこんでくれるように」と語っている(9節)。(アラビアに絶えず水が流れている川があるだろうか。) 続いてレミュエルには，「この谷のように堅く固く，びくともせずに主の命令を守ってくれるように」と諭している(10節)。

次にニーファイは，「父は天幕の中に住んでいた」(15節) と説明している。(これは長期間の滞留を意味するものだろうか。)

エルサレムへの往復の旅については，興味深い言葉の使い分けが行なわれている。例えば，ニーファイと兄たちが真鍮版を求めて出かけた時，彼らは天幕を持って「エルサレムの地へのぼって」行った(3：9)。(なぜ彼らは天幕を携えて行ったのだろうか。どの方角からエルサレムに向かっても「のぼる」という言葉を使ったのだろうか。) レーバンとの交渉が難行した時，彼らは「自分たちの相続した土地へ(くだって) 行って」，金銀を取り集めることにした(22節)〔訳者注：括弧内は英文より訳出〕そして彼らはエルサレムにあるレーバンの家に「もう一度」のぼっていった。(23節)(これは極めて興味深いことである。彼らはエルサレムにのぼってきてから，相続の地へ行くためにどちらへくだって行ったのだろうか。荒野と相続の地はいずれ



上：「誓いの井戸」という意味のベエルシバは，リーハイがエルサレムを去る何百年の昔，アブラハムとアビメレクによって名づけられた。（創世21：31参照）もしリーハイがエルサレムから南の方に道をとったとすれば，このオアシスの村を通ったと思われる。



下：リーハイがエルサレムから南に下る道をとったとすれば，一行はヘブロンに近いタルコミナの肥沃な盆地と樹木の茂った山々の付近を通って行ったに違いない。

も同じ方向でくだり道だったのだろうか。彼らは紅海のそばのリーハイの宿営地からどれくらい離れていただろうか。）

ニーファイが真鍮版を持って帰ると，リーハイは「牲と燔祭を主に捧げ」た（5：9）。（犠牲の動物はどこで手に入れたのだろうか。彼らは犠牲の動物を連れて行ったのだろうか。それとも近くに人々がいて彼らから動物を買ったのだろうか。）7章でニーファイと兄たちはイシメルの家族を連れにもどるが，ここでもエルサレムに「のぼる」という言葉と荒野に「くだる」という言葉が使われている（2－5節〔訳者注：日本語訳には訳出されていない〕）。（彼らが真鍮版を得た時から，この2回目の旅をしてもどるまでの間に，どれくらいの時間がたっていたのだろうか。）

16章で一行はリアホナを受け取り，「荒野へ持って行くべき一切のものと，主に賜わった食糧の残りとをことごとく集め」（エルサレムから携えてきた食糧のほかにも食糧があったのだろうか），「また…あらゆる種類の種子を取った。」（11節）（どこで種子を取ったのだろうか。収穫したのだろうか。買ったのだろうか。それとも初めから持ってきていたのだろうか。）

次の節に，「私たちは天幕を携え，レーマン川を横ぎって荒野へ出発した」と書かれている（12節）。（これはリーハイの宿営が川の西側にあったということだろうか。一行はこの時東岸を南へ進んでいたのだろうか。）次いで16章13節から，一行は「ほぼ南南東の方角」に4日間旅をし（急いだように思われる），そして彼らがシェゼルと名づけた場所に宿営した。（4日間の旅でどこに来たのだろうか。）

「そしてまた〔ということは少なくとも短期間そこに留まったに違いない〕前と同じ方向〔つまり，南南東〕へ向かって，紅海に近い国境の荒野の中で一番土地が肥えたところを追って進んで行った。」（14節）（最も土地が肥えたところとはどういう所だろうか。）

この時彼らはどれくらい進んだだろうか。ニーファイはただ次のように答えているだけである。「道々食料にする肉を弓矢と石と石投器によってとりながら，何日も何日も〔つまり，のんびり，しかし留まることなく旅を続けたという意味だろうか〕旅をした。」（15節）そしてまた休息を取った（17節）。

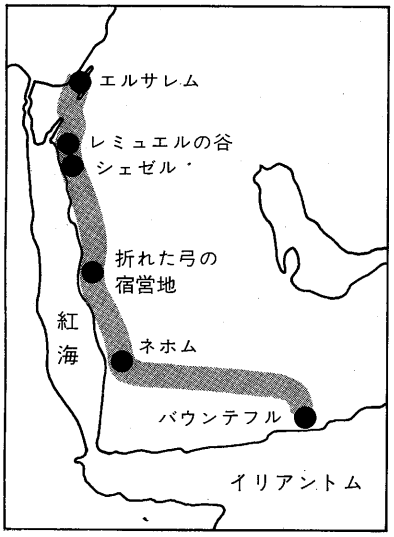
ここで災難に見舞われた。18節で「純良な鋼でできている」ニーファイの弓が折れ，兄たちの「弓もまた弾力を失っていた」ので，兄たちは気を転倒させた（21節）。（何が原因で鋼の弓が折れ，他の弓も弾力性を失ったのだろうか。）

ニーファイが木で新しい弓と矢を作って，獲物をとってから（23，31節）（彼は砂漠の中でどんな木を見つけたというのだろうか。またどんな動物を獲ることができたのだろうか），彼らは「再び旅路につき，始めとほぼ同じ道筋を進んで行った。」（一行の方向を知るのにこれは重要である。）続いてニーファイは，「何日も何日も旅をした後しばらく留まるためにまた天幕を張った」とはっきり書いている（33節）。（この言葉には半永久的にもその場に留まるという響きがないだろうか。これはどの地点であっただろうか。また，「しばらく」とはどれくらいの期間だろうか。この表現は何かある定まった期間を指しているように聞こえる。）次にイシメルが「死んでネホムと言うところに葬られた。」（34節）（その地をネホムと呼んだのはだれだろうか。なぜそこに葬ったのだろうか。病気，埋葬，弔いの儀式にどれくらいの期間を要しただろうか。）

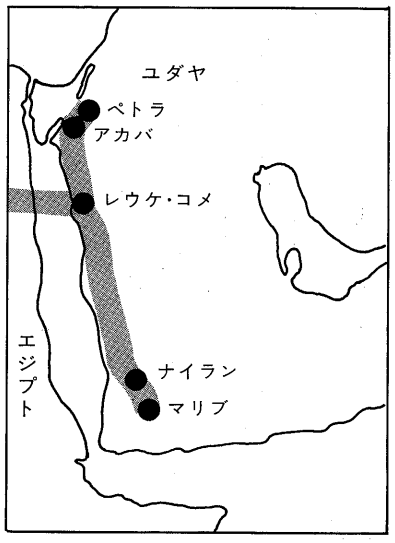
17章で，一行は再び旅を始めたが「この時からほぼ東の方へ」進んで行った。（旅が終わるまでこの方角に向かっ

図1 リーハイの道に関係があると思われる古代の報告2件

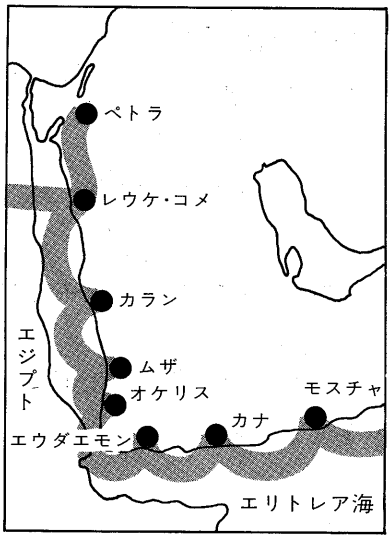
紀元前600年
予想されるリーハイの道



紀元前24年
ストラボ
リーハイの一行が通ったと思われる道の大部分を行進した不運な1万人のローマ軍の行軍の報告



紀元57年
ペリプラス
エジプトからインドへ航海したギリシャ人の手記



1．ユダヤからペトラまでは「砂漠」である。(ストラボ16：4：21)
2．商品がレウケ・コメからペトラまで陸路を運ばれた。(16：4：24)
3．この街道沿いに多くの民が住んでいた。(16：4：21)
4．ペトラからレウケ・コメまでの隊商の道路は「軍隊」も通れると報告。(16：4：23)
5．アラビアは水が欠乏し（16：3：1)，灼熱の暑さのため不毛である。(16：3：3)
6．アラビア人はらくだを飼っている。(16：3：1)
7．紅海の沿岸に「木は一本も」生えない。(16：3：6)
8．アラビア西南部には豊かな富がある。(16：4：3)
9．マリブではアカバから70日かけて旅をしてきた商人が物々交換によって乳香を手に入れていた。(16：4：4)

1．ナバテア人がレウケ・コメからペトラに至る道を支配していた。(ペリプラス19)
2．レウケ・コメからインド洋まで広いアラビアの地域に数多くの異なった部族が住んでいる。（ペリプラス19)
3．ムザの近くには，羊やらくだを飼う遊牧民が住んでいる。(ペリプラス20)
4．ムザにはアラブの船乗りの船主が集まっており，商いでにぎわっている。(ペリプラス21)
5．オケリスは市場の町で給水場である。(ペリプラス25)
6．アラビアではらくだが香料を運ぶ。(ペリプラス27)
7．モスチャ（リーハイ道の「バウンテフル」と考えられる）では乳香が「あたり一面にたくさん山積み」されている。そしてここから輸出されている。(ペリプラス32)

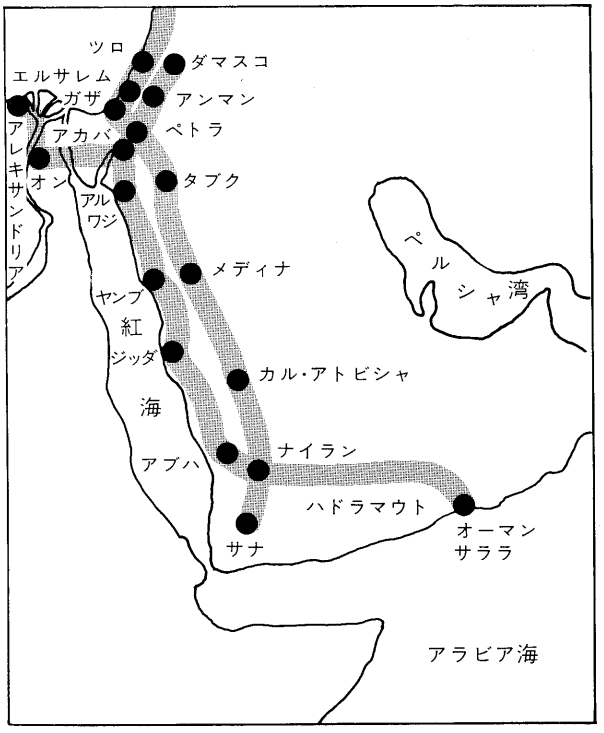


図2
サララからエジプト，地中海に達する古代の香料の街道

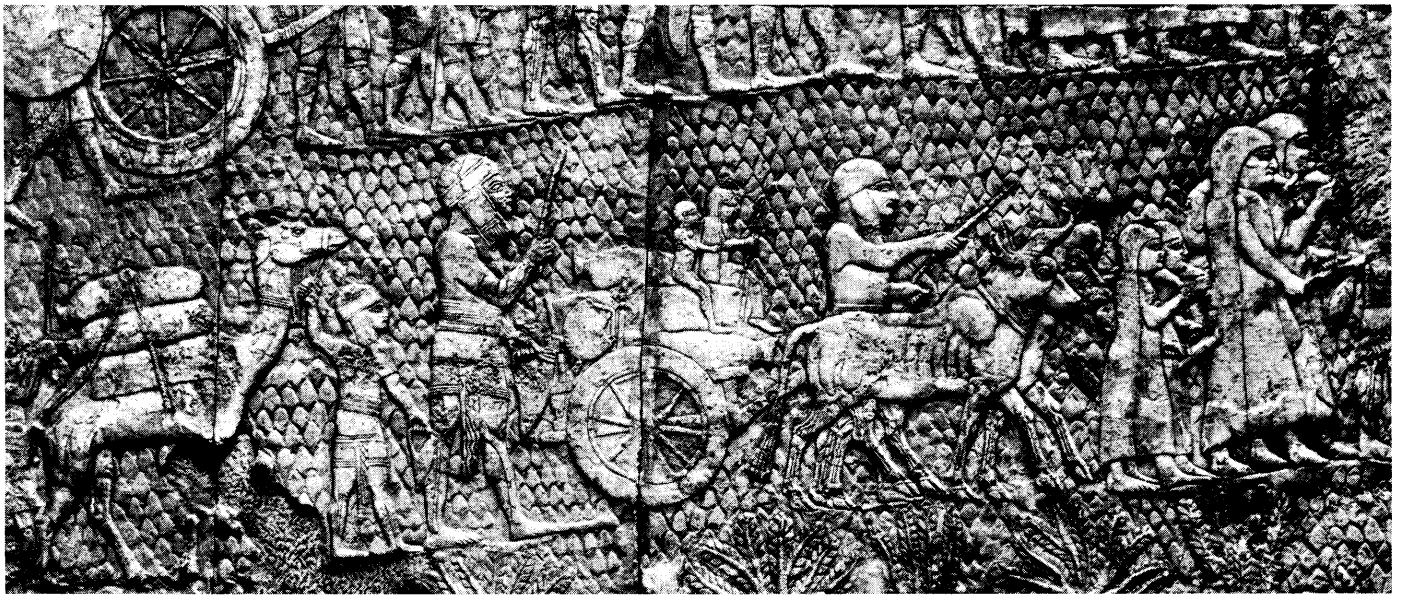
図3
古代ニネベのセナケリブの宮殿にあるこの石の浮彫りは，アッシリア人がユダのラキシの町を紀元前701年（大体の年代）に陥落させた時の模様を描いている。この部分図から，リーハイの時代から1世紀以内，リーハイの町エルサレムから40キロ以内のユダヤ人の捕虜の服装がうかがえる。また，紀元前7世紀のユダヤ人がらくだに荷物を載せて運んだ様もうかがえる。リーハイとその一行も，ひとたび砂漠に出ると，大体これと大差のない様子をしていたものと思われる。

表
レミュエルの谷に滞留した当時のリーハイの一行（最少限）

名前	
1．リーハイ	統率者
2．サライア	リーハイの妻
3．レーマン	リーハイの長男
4．レミュエル	リーハイの次男
5．サーム	リーハイの三男
6．ニーファイ*	リーハイの四男
7．ヤコブ**	荒野でリーハイに最初に生まれた子
8．ヨセフ**	荒野でリーハイに生まれた末子
9．ゾーラム	元レバーンの召使い（Ⅰニーファイ4：35）
10．イシメル	少なくともふたりの息子と5人娘の父
11．イシメルの妻	
12．イシメルの長男	モルモン経はイシメルの「二人の息子およびこの二人の家族」（Ⅰニーファイ7：6）と書いて彼らに妻子がいたことを暗に示している。
13．長男の妻	
14．イシメルの次男	
15．次男の妻	エラスタス・スノー長老は，予言者ジョセフ・スミスがリーハイの娘はイシメルのふたりの息子と結婚したと語ったことを書き残している（「説教集」23：184）
16．イシメルの長女	ゾーラムの妻（Ⅰニーファイ16：7）
17．イシメルの娘	レーマンの妻
18．イシメルの娘	レミュエルの妻
19．イシメルの娘	サームの妻
20．イシメルの娘	ニーファイの妻

*ニーファイの姉妹たちの名前はモルモン経に出てこない。その姉妹たちがエルサレムで生まれた姉であったか，あるいは妹であったか，それとも荒野か約束の地で生まれた妹であったかわからない。

**ヤコブとヨセフが生まれたのはレミュエルの谷であるかどうかわからない。ふたりの名前がモルモン経で初めて出てくるのは，バウンテフルを出発する時で，リーハイがエルサレムを出てから約10年もたってからのことである（Ⅰニーファイ18：7）。



たのだろうか。)「私たちはみな荒野を旅して多くの艱難をふみこえて行った。」(1節)(旅をするというのとふみこえて行くというのと何か違いがあるのだろうか。「多くの艱難」とは何を意味するのだろうか。)

2節を読むと彼らが「生肉を食べて暮した」ことがわかる。(これが「多くの艱難」を指すのだろうか。なぜ調理せずに食べる必要があったのだろうか。)

荒野に8年間留まった後(4節),彼らは「果実と野蜜が豊にあるから,バウンテフルと名づけた土地にきた。」(蜜の存在はそこに花があったことと,花の咲く果実があったことを示している。)「私たちはここで海を見てその名をイリアントムと名づけた。〔紅海とは別の海に違いない〕これを解けば多くの水と言う意味である。」(5節)(紅海より大きかったのだろうか。)そこで彼らは「天幕を海辺の近くに張った。」(6節)(ということは,居心地のよい海岸であったか,少なくとも天幕を張って,動物を飼える草原のような広がりがあったに違いない。)7節でニーファイは「山に登り」(たった一つしかなかったのだろうか。この山は近くにあったに違いない),どこへ行って「熔すべきあらがねを見つけ」ればよいかを主にたずねた(9節)。(近くに鉱床があったのだろうか。)こうして彼は「岩石から熔し出したあらがねで道具」を作った(16節)。(作るのにどれくらいの時間がかかっただろうか。ニーファイはどんな道具を必要としただろうか。)ニーファイの兄たちは苦難に耐え切れず,従わなくなった。そこでニーファイが叱責すると,彼らは怒って「海の深みに投げ込もうと」彼に近よった(48節)。(砂浜ではそのようなことはできない。従って,バウンテフルには崖があったものと思われる。)

しかし神の力にさえぎられ,震えおののいた彼らは,ニーファイに協力して船を造り始めた。ニーファイは18:2で,その造船は「人のやり方」ではないと3度も強調している。(彼は人の方法による造船技術をどうして知ったのだろうか。彼の造船技術はどう違っていたのだろうか。材料は何であっただろうか。船を造る大きな木がバウンテフルにあったのだろうか。)そしてとうとう「野の中からとった多くの木の実と食べる肉とまた多くの蜂蜜と,…食糧を用意するなどあらゆる準備を終ってから,全部の荷物と種子とを持ち,…船に乗り込んだ。」(6節)(再び種子が登場する。彼らはまた収穫したのだろうか。どんな食糧を携行したのだろうか。どれくらいの期間の航海を考えていたのだろうか。荒野に狩りに出かけるのが大して苦にならないほど,バウンテフルの地は狭かったのだろうか。)

以上がニーファイの残した手がかり,私たちの心に浮かんだ疑問である。そこで私たちは疑問に対して考えられる答えを総合し,古代と近代の学者の著書を吟味して,そこから得る情報を活用しながら考察を始めることにした。

私たちは旅行の準備をしながら,中東の7ヵ国に住むアラブの友人100人以上に,この計画を説明した手紙を書き送った。そうしたところ,彼らは私たちを激励し,援助を申し出てくれた。私たちはこれに感激すると同時に,感謝の念で一杯になった。

私たちの調査によって得た情報に劣らず重要なのは,この調査に対する大勢の友人の理解であり,彼らが喜んで提供してくれた意見や情報である。特に次の方々の労をいとわない尽力と協力がなければ,とてもこのように好首尾には運ばなかったであろう。その方々とは,ヨルダンのアンマンに住むサリム・サアド,エジプトのカイロのアンギー・チュクリ,サウジアラビアのジッダのハッシブ・ダヤニ,同じくサウジアラビアのアブハのシェイク・ヘルワン・ハブタル,イスラエル領西岸地区タルクミアに住むサアディ・ファタフィタ,そして同じくイスラエル領西岸地区エルサレムのナビール・マスタキムの各氏である。

このような多くの人々の助言を得ると共に,私たちは直ちに図書館で調査にかかった。また,ユタ大学とブリガム・ヤング大学の中東に詳しい学者に会見を求めて,間もなく取りかかる仕事に対する心の備えをした。

徐々に映像がはっきりしてきた。モルモン経を大ざっぱに読んでいると,リーハイとその家族が人々も住んでおらず,文明もない,全くの真空状態のような砂漠に旅をしていったような印象を受ける。しかし気をつけて読むと,幾つかの事柄から,彼らが人々の住んでいた地域を通ったということがわかる。まず,家族や荷を運ぶ動物に必要な食物と水がなければ旅行できない。ニーファイは奇跡的にマナが降ってきて一行の飢えを満たしたとは記録していない。彼らは食物を得るために懸命に働かなければならなかったし,時には飢えのために不平をこぼすこともあった。モーセが杖を使って民に与えたように,ホレブの岩から奇跡的に水がほとばしり出たとも告げられていない。従ってリーハイの家族も,当時の他の旅行者が同じ地域でしたように,皆が共同で使用するオアシスからオアシスへと旅行して生き長らえたに違いない。(もちろん,天から送られたリアホナの助けも得ていた。)私たちは中東を旅していて,人々の住んでいない水源などというものを目にしたことはなかった。水がこれほど貴重な地方では,人々の知らないオアシスがたくさんあるなどということは考えられないことである。

宿営地のひとつネホムは,人の住んでいた土地であったかも知れない。というのは,他の宿営地,例えばレミュエルの谷やシェゼルの宿営,バウンテフルの地は皆自分たちで名づけているのに,ニーファイはこの地を「ネホムと呼ばれていた」と言っているからである。もっとも一行が名づけた所も,よく知られていたオアシスにリーハイが別の名前をつけたとも考えられる。セム系の人々は自分たちの個人的な経験に基づいて物に名前をつける習慣があった。上にあげた場所はリーハイの一行にとって非常に大きな意味を持っていたので,リーハイが家族全員の知っている名前をつけて自分が教えることを心の中に刻みつけようとしたことは明らかである。

ニーファイは一行が犠牲を捧げたことを何度か告げている。どこから犠牲の動物を手に入れたのだろうか。やぎや羊の群れは食べ物を求めてあちこち歩きまわるので,連れて歩いていたのでは,旅の速度はかたつむりのように遅く

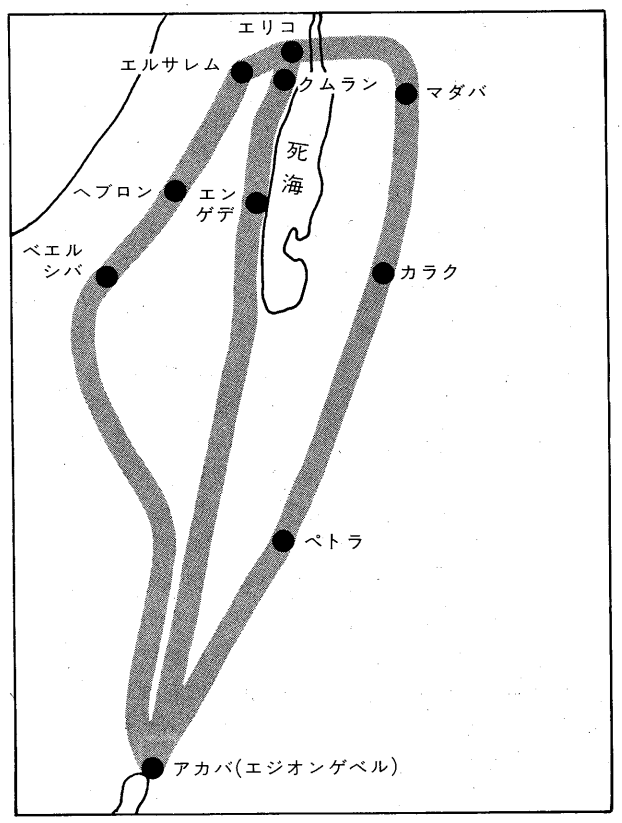


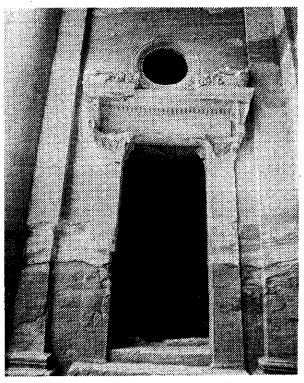
図4

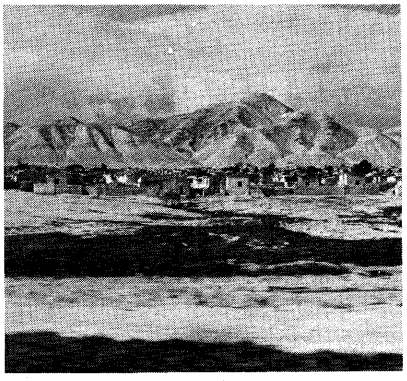
紀元前600年にエルサレムからアカバに至る3つの可能な経路

第一の経路：東の方へエリコまで行き，ヨルダン川を渡って王の公道を通ってマダバからアカバに達する。

第二の経路：エリコの近くまで東へ行き，そこから死海の西岸を南下し，ワジ・アル・アラバを通ってアカバに行く。

第三の経路：ヘブロンまで南下し，南西の方向にベエルシバに達し，ワジ・アル・アラバまで下ってアカバに通じる。第三の経路の変形は，ヘブロンで分岐してエンゲデの南で第二の経路に合流する。





上：リーハイが王の公道を通ったとすればエドムの古代の首都，ペトラを経由したに違いない。モーセの時代，ペトラはセラと呼ばれていた。台地に築かれたペトラの町は，東西にワジ・ムサ（モーセの谷）が走っている。ここは，モーセが岩を打って水を湧き出させたと伝えられている所である。ペトラは王の公道を通る隊商に課す税金で繁栄した。

左下：石を刻んで作ったペトラの多くのギリシア風の墓。リーハイがエルサレムを去って200年を経た頃のものと思われる。

右下：エリコ。パレスチナでも最古の町のひとつであるエリコは，ヨルダン川が死海に注ぐ地点から北へ約11キロの所にあり，千年の歴史をもつ町であった。

下：王の公道から一望した早春のモアブの地。エルサレムから最も東寄りの道をとったとすれば，リーハイはこの地を通ったと推測される。

なっていたであろう。それに，らくだとは違ってやぎや羊は毎日水を必要とした。しかし連れて歩かなくてもリーハイは各地にいるベドウィンの牧者からこれらの動物を買うか物々交換で手に入れることができた。しかもそうすれば，普通の旅行隊の速度で移動することもできる。

他の民の存在については，遊牧の生活を送るベドウィンが古代からアラビア半島に住んでいたことは疑う余地のないところである。例えば，「ミデヤンの祭司」でモーセのしゅうとであったエテロは，ベドウィンとしてミデヤンの地に住んでいた（出エジプト2：16；3：1）。恐らくリーハイが旅して通ったと思われるこのサウジアラビアの北西部には，おびただしい数の家畜類が住んでいたものと思われる。イスラエルの軍隊はミデヤンを占領して，675,000頭の羊とほかにもたくさんの宝物を戦利品として手に入れている（民数31：43）。

リーハイのたどった道沿いに人々の住んでいた場所があったことを示すもうひとつの証拠は，ニーファイが船を造り始めたくだりに現われる。彼は「人のやり方で船をつく」らなかったと断言している（Ⅰニーファイ18：2）。船を見たことがなくてそのようなことが言えただろうか。私たちは紅海の沿岸にずっと造船の村が続いているのを見て，しかもそこでは大昔からの技術が連綿として何代も何代も受け継がれてきたことを知った時，実に目を開かれる思いがした。

リーハイの時代から600年以内，紅海の岸に沿った不毛の荒野に村々があり，十分文明が確立していたことは，ふたりの生き証人の話から証明される（図1参照）。

ギリシャ人の歴史家ストラボは，直接聞いた話をもとに，南アラビアにある「香料の国」を攻め落とすため，アエリウス・ガルスの下に紀元前24年にエジプトを出たローマ軍の気の毒な1万人の歩兵のことを書いている。兵士たちは私たちがこれから恐らくリーハイの通った道であろうと説明する街道の大部分を踏破している。そして多くの民がこの街道沿いに住んでいたこと，彼らがアラビアに上陸したレウケ・コメからヨルダンのペトラまで北に伸びるこの街道は重要で，よく知られていたこと，さらに旅が困難であった（主として忠実でない道案内人がもとで飢え，渇き，病気に悩み大部分の者が死んだ）ことを確認している。また，水をらくだに乗せて運ばなければならなかったことと，アラブの行商人から食糧を買わなければならなかったことを報告している。（アマシアのストラボ，*The Geography of Strabo*「ストラボの地誌」，ホレイス・レオナード・ジョーンズ訳，7：353−63）

ある無名のギリシャ人が紀元57年頃「エリトレアン海のペリプラス」という旅行談を書いている。彼はアラビア半島の周囲を航海し，リーハイが通ったと思われる街道の途中に位置する多くの港に立ち寄っている。この本はリーハイの頃から600年以内にこの街道に数多くの村や市場があったこと，オーマンからの香料の運搬が頻繁であったこと，海運が盛んであったこと，そして常時季節風が吹いていたことを直接目で見た証言としてしたためている。（*The Periplus of the Erythrean Sea*「エリトレアン海のペリプラス」ウィルフレッド・H・ショーフ訳，1974年）

当地の近代および古代の地図のどちらを見ても，古代世界で最もよく用いられた街道の中に，広く知られた香料の街道が入っている。これは大きな発見である。そのひとつはアラビア半島の約4分の3近く紅海の沿岸を走り，途中で東に向かっている。そしてナイランで再び南に方向を変え，イェーメンに入っている。第二の街道は第一の街道よりも100キロから200キロ内陸を大体第一の街道と平行して走っており，ナイランで海岸沿いの街道と交差している。そしてこの街道はナイランからサララまで東に向かっている。これらの街道は少なくともリーハイの時代を900年さかのぼる頃から，すなわち2,200年以上も前から広く使用されていた（「ペリプラス」pp.120−21参照）。このふたつの街道が存在したことの証拠は今日でも明らかである（図2参照）。どちらの街道も，シバ人が紀元前10世紀に戦略上の要地に石で築いたとりでの廃虚から容易にたどることができる。

また，ヨルダンのペトラから北緯19度に近いサウジアラビア南部のナイランに至る街道も，らくだを引いて移動した何千人もの人々が街道の両側の丘に露出している平坦な石にかき文字を刻んでいるので容易に確認することができる。これらの行商人は荷物を一杯積んだらくだを引いて，北へ向かって黙々と単調な旅を続けた。彼らが運んだ香料の貴重な荷物は，エルサレムやエジプト，あるいはバビロンの神殿の欲求を満たしたのであった。

ここでいう街道という言葉は誤解を招きやすいので注意しなければならない。この言葉は，明確な，比較的狭い道あるいは道路を指すのではなく，この谷からあの峡谷へというふうに大ざっぱな道筋を指すものである。この街道の幅は地理的な状況によって様々で，1キロから20キロにもわたる。従って旅行者は互いに相当離れていても，依然として同じ街道の同じ地点にいることもあり得た。

私たちは紅海の沿岸に沿って人々がよく利用した南南東に向かう街道があるのを発見した。リーハイは当時よく利用されていた道を離れて，水のない山や砂漠を歩きまわるようなことはしなかったであろう。モルモン経は彼が身を隠しつつ旅をしたとは言っていないし，一部の人が考えているように，彼は逃げているとも言っていない。従ってリーハイは，当時知られていた公道を進んだものと思われる。この考えをさらに支持する証拠として，紅海の境を旅した（Ⅰニーファイ2：5），言い換えれば古代から香料の街道が存在した場所を通ったと言っているニーファイの言葉をあげることができる。

さらに，香料の街道はオアシスあるいは古代の井戸のある場所を経由していた。サウジアラビアの自然資源省が作成した現代の地図によると，この街道には平均間隔30キロで合計118の池が存在する。リーハイが水なしに独力で新しい街道を切り開いたとは考えられない。都市の住民が砂漠の民も知らない池を次々と都合よく発見することはおよそ不可能である。

リーハイとその家族は旅に出るや，道中多くの見知らぬ民に，しかもイスラエルの民ではない人々に出会ったに違いない。リーハイの時代に街道を往来していた旅人の大部分はアラビア人であることと，サナア（今日のイェーメンの首都）から来たサベア人もよくリーハイの天幕を訪れ，リーハイも彼らの天幕を訪ねていたと思われる。

このような旅行前の研究によって，私たちは，リーハイの家族が通ったと思われる南へ向かう街道を少なくともひとつ見つけたと思った。しかしその存在は逆にいろいろな疑問を生じた。なぜ香料はそれほど価値があったのだろうか。（1頭当たり225キロも積んだらくだの大きな隊商が北へ向かったことをいろいろな人が記録している。）参考までに私たちは聖書をひもといてみた。

エホバは，モーセを通して古代イスラエルに主を礼拝するに際しては香料を使用するようにと命じ，合わせて香料を作る方式を示しておられる。それは蘇合香（そごうこう），シケレテ香，楓子香，乳香をそれぞれ同量混合するのである。この混合物は神聖であるので，他の用途に使うことも，権限を持たない者がたくこともできなかった（出エジプト30：7－9，34－38；レビ10：1－7参照）。この香の煙は特に神のもとにのぼっていく祈りを象徴しており（詩篇141：2；黙示8：3－5参照），もともと至聖所を隠している幕のそばでたかれた。また，犠牲の動物を殺して焼く時に生じる臭いを消すため，防臭剤として使われたとも考えられる。贖いの日に至聖所で乳香がたかれ，贖罪所が「芳香のある煙で包まれる」ようにした。さらに研究を進めると礼拝に乳香を用いたのは，ユダヤ人だけではないことがわかった。この慣習は「ほとんどすべての古代の民（エジプト人，バビロニヤ人，アッシリア人，フェニキア人等）の間に共通に見られた宗教上の儀式であった。」

これでなぜ乳香がそれほどまでに切実に求められたかがわかる。しかし，なぜ乳香はそれほど高価だったのだろうか。また，どこで入手していたのだろうか。私たちは間もなく乳香とは乳香の木の薄い黄色をした樹脂を乾燥したものであることを知った。この木は，アラビア半島の南端にある小さな鎌形をしたサララという土地に固有のものである。サララはオーマンのサルタン領ドホファル州に位置し，アラビア海の沿岸にある。ここでは，年に2回樹液が採取される。こうして採れるねばねばした樹脂には強い香りがあり，チューインガムのようにかむこともできるし，たくこともできる。事実今日アラビアの子供たちはこれをかんでいる。聖書の時代に乳香と没薬はみどりごキリストにささげる贈物にふさわしいものとして金に匹敵したが，（マタイ2：11参照）現在ではその値段はチューインガムとほとんど変わらない。

このことから，私たちの心に幾つかの疑問が生じた。リーハイが相当富を持った人であったことは明らかである。ニーファイが何気なく「金銀…貴重品」とあげていること自体，彼らが平均以上の階層に属していたことを示している。

リーハイは天幕を持っていた。当時天幕を造る仕事はやぎの毛の中でも強いものを選んで織る手間と時間のかかる面倒な作業であった。しかし彼らは天幕を所有していた。私たちの案内を務めてくれた著名な歴史家でもあったサリム・サアドによれば，ユダヤの旅行者は普通洞穴に宿営したということであった。天幕は砂漠を旅行する人が使用す

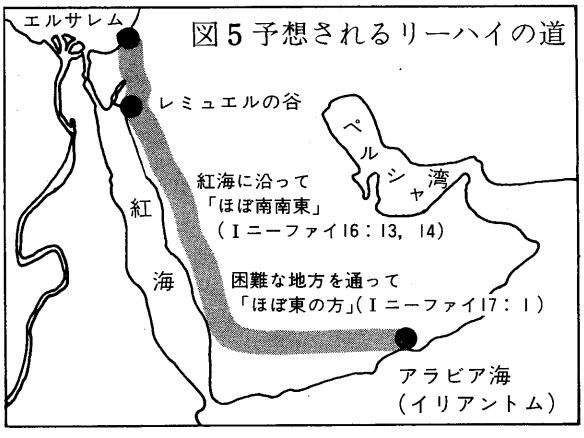
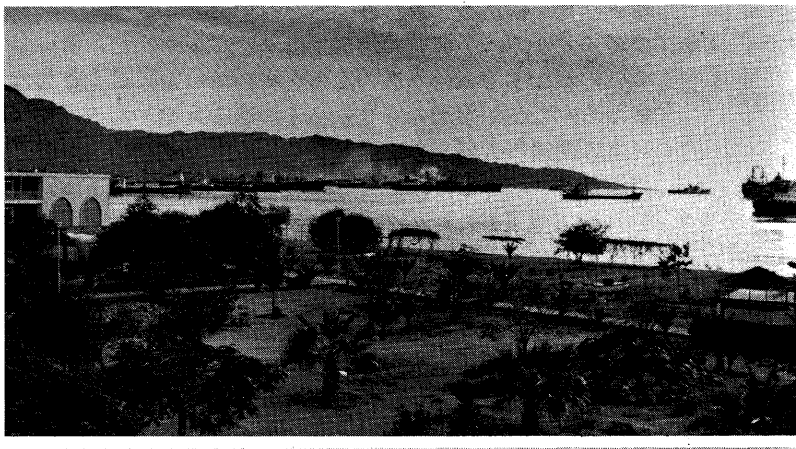
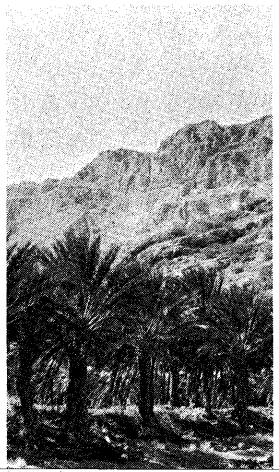


図5 予想されるリーハイの道





上：アカバ湾は紅海の北東に伸びる入江である。リーハイはここを通過したか，または「紅海の海辺に近い国境のそばへきて」（Ⅰニーファイ2：5）とあるように一時滞在した。

左下：エンゲデのオアシスは，荒涼とした死海西岸にこつぜんと姿を現わす。この道を経由して南下したとすれば，リーハイはこのオアシスや別の新鮮な水の湧き出る泉のほとりに滞在したと思われる。

右下：ワジ・アル・アラバの上流。エルサレムからの道が合流してひとつになっていることがわかる。

るものであった。なぜ都市に住む者が，すぐに天幕を用意できたのだろうか。

リーハイはエルサレムから何キロも離れた「相続の地」に住んでいたのではないか，とサリムは推測した。ここでやぎや羊を飼い，果物や穀類を栽培して，それを城壁に囲まれたエルサレムの町に持ち込み，市場，すなわちスークスで売っていたのかも知れない。もうひとつの可能性は，しばしば砂漠に出かけて行って，エルサレムの市場で売る品物をアラブの隊商から買っていたとする考えである。リーハイの富は，この商取引の結果得たものであったかも知れない。こういった仕事に携わるには，エルサレムの南の砂漠で隊商が到着するのを待つ間，避難場所として天幕が必要であったと思われる。

もちろん，これらは皆推測にすぎない。しかし，もしリーハイが何らかの形で砂漠の民と交渉を持っていたとすれば，次の点が説明できる。(1)特別に準備をしなくても家族を伴って旅をするに足る天幕と動物を明らかに持っていたこと。(2)息子たちが荒野の中で天幕を扱ったり，旅行したりする術を知っていたこと。(3)リアホナを受けるまでの間，主要な街道や池のある所を十分知っていて生きのびることができたこと。

一行がエルサレムの地を出た時の状況については，ややしっかりした根拠に立って話を進めることができる。エルサレムやユダヤの丘陵地帯では，荷物を運ぶ動物に主としてろばが使われたことはほぼ確実である。岩の多い道や町の曲がりくねった路地，アーチ門やつき出た露台がある通りでは，らくだよりろばの方が便利だからである。らくだの商人がエルサレムを迂回した（エルサレムの商人は隊商が東へ向かうあたりまで出て行って交易した）ひとつの理由は，エルサレムの地面が岩でごつごつしており，とがった岩肌にらくだの大きくて柔らかいクッションのような足が当るとけがをするからであった。らくだの隊商は，西海岸の砂地の道，続いて比較的滑らかな王の公道，そしてシリヤからアカバ湾までヨルダン川の東を走っている紀元前23世紀の道を通り，さらに北に旅を続けていった。

このように丹念に研究した結果，私たちはこれでほぼエルサレムを出発したリーハイの一行の名簿と旅程を再構成できると感じた。まず一行に加わった人々の顔ぶれから始めた。リーハイが妻のサライアと4人の息子を伴ったことは知られている。娘たちがいたかも知れない。というのはニーファイが後年約束の地に着いてから，何気なく「私の姉妹たち」（IIニーファイ5：6）と言っているからである。もっとも娘たちが荒野で生まれたとも考えられないわけではない。後にイシメルとその妻，少なくともふたりの結婚していた息子とその家族（Iニーファイ7：6），5人の未婚の娘，それに元レーバンの奴隷であったゾーラムが一行に加わった。このようにリーハイの一行は少なくとも20人の人員で構成され，砂漠に向かったものと考えて差し支えないであろう（表参照）。

なぜリーハイはほかの家族ではなくイシメルの家族を選んだのだろうか。リーハイの4人の息子とゾーラムにちょうど必要な数の5人の娘がイシメルにいたことはまことに好都合であった。しかし，リーハイがこの家族を選んだのはそれだけの理由からだろうか。エラスタス・スノーが語った言葉は，このことに幾らかの光を投じている。彼は予言者ジョセフ・スミスが語ったようにイシメルの「息子たちはリーハイの家族と姻戚関係にあった」（*Journal of Discourses*「説教集」23：184)と言っている。モルモン経はイシメルの「二人の息子およびこの二人の家族」（Iニーファイ7：6）のことに触れている。このことはイシメルにふたりの息子がいたことと，ふたりともエルサレムを去る時にはすでに結婚していたことを示している。以上の事実とジョセフ・スミスの言葉を総合すると，リーハイにはふたりの年上の娘がいて，エルサレムを出る前に両方の家族は姻戚関係にあったと結論することができる。リーハイが使いをやってその娘たちの家族も一緒にエルサレムの破滅を免れるようにしたのはごく自然なことである。

この旅行者の一行をもっと身近に感じられるように，何人かの年齢を推測してみることにした。ニーファイはエルサレムを出た時，十代であったと思われる。しかしレーバンの真鍮版を手に入れるためにもどった時は，自分で「まだ大そう若かったが，もう身のたけは高く」と描写できる程までに成長し大きくなっていた（Iニーファイ2：16；4：31も参照)。力もゾーラムをつかまえておさえつけたり（Iニーファイ4：31)，レーバンの首を切り落としたり（Iニーファイ4：18）できる強さになっていた。また，救い主を示現で見るなど並はずれた霊的な経験をするまでに成長していた（Iニーファイ11章)。しばらくしてニーファイと兄たちは再びエルサレムにもどり，イシメルとその家族をリーハイのもとに連れてきた。この時ニーファイは結婚する年齢に達していた（Iニーファイ16：7)。そして妻は荒野で子供たちを産んだ（Iニーファイ18：19)。このような点を考慮すると，ニーファイはエルサレムを出た時16歳，主の訪れを受けた時17歳，レーバンの首をはね，ゾーラムをつかまえた時18歳，結婚した時19歳位であったのではないかと推測することができる。

モルモン経を同じように吟味したジョージ・Q・キャノン副管長は，エルサレムを出た当時の「ニーファイは恐らく15歳を越えていなかっただろう」と書いている。（ジョージ・Q・キャノン *The Life of Nephi, the Son of Lehi*「リーハイの息子ニーファイの生涯」p. 14）

ニーファイの兄たちが2年間隔で生まれたと仮定すれば，その年齢も推測できる。母親のサライアは最初の子供を産んだ時16歳であったとすれば，最後の子供を荒野で産んだ時は44歳になっていたと考えられる。これは当時も今も多くの女性にとって出産の可能な年齢である。中東の友人たちが話してくれた慣習からみれば，リーハイは妻より約10歳年上であったと思われる。

イシメルにはすでに結婚している息子がふたりいたのに対し，リーハイにはひとりもいなかったことからして，イシメルはリーハイよりも年上であろう。多分リーハイより

4歳位年上で，妻はイシメルより10歳若かったと思われる。

ところで，リーハイの最初の一行がわずか6人であったとしても，エルサレムを出るのに何頭のろばが必要であっただろうか。食糧，個人の所有物，天幕を運ぶのに9頭から12頭必要であったと私たちは計算した。私たちが訪れたベドウィン人によると，天幕は約230キロの重さで，壁，仕切り，屋根を別々に荷造りし，3頭のろばで運んだに違いない，ということであった。天幕ひとつに3頭のろばと，一人分の食糧に一頭のろばが必要として，少なくとも9頭のろばが必要であるという結論に到達した。これにイシメルの一団が加わったので当然家畜の数はさらにふえたことであろう。

次に，一行がエルサレムまたはその近郊を出た経路であるが，私たちはエルサレムから3つの道がアカバの町に通じていることを知った（図4参照)。このアカバは紅海の北端にあって，香料の街道の重要な交差点であり，同時に紅海に沿って南に向かう唯一の入口でもあった。そのひとつはエルサレムから東に吹きさらしのユダヤの荒野を通ってエリコに向かい，ヨルダン川を渡って王の公道に合流する。そして死海の東側をマダバ，カラク，ペトラの町々を経てアカバに達する。いずれも今日のヨルダンのハシェミテ王国に所属する。これが南北をつなぐ昔の第一の道であって，山中をうねり，ワジを越えて通じていた。（ワジとは砂からなる低地または山々に囲まれた谷で，周囲の急な山から雨水が流れ込む。従って雨期には危険な泥の急流となる。しかし乾期には，周囲が荒々しい踏破できない丘陵地帯であっても，ここは砂地の「ハイウェイ」となって，なだらかな気持ちのよい道路に早変わりする。）リーハイはこの東の経路を通ってアンモン，モアブ，エドムの王国を通過しなければならなかったであろう。家族が危険な状態に陥ったことはないにしても，国境を越えるごとに税を課せられていたに違いない。

二番目に考えられる経路は，エルサレムを出て南へヘブロンに通じ，さらにベエルシバに続き，南へ下ってワジ・アル・アラバを通ってアカバに達する。この経路の変形として，ヘブロンで東に向かい，徒歩で越えるしかないソルト山を渡り，急な坂を降ってエンゲデのオアシスのすぐ下を死海の西岸に出，そこでこの後に紹介するもうひとつの経路に合流するものがある。これは選ぶにしてはあまりにも複雑で困難な道に思われる。

第三の経路は第一の経路と同じようにエルサレムから東に向かい，エリコのすぐ前で南に折れて，クムランの洞穴や崖を横に見ながら死海の西岸を南へ下る。そしてワジ・アル・アラバを通ってアカバに達する。過去の歴史に通じた中東の友人たちは，この最後の経路が最も可能性が高いと私たちに告げてくれた。

しかし，リーハイがエルサレムを出るに際してどの道を通ろうと，3つの道は皆死海の南のワジ・アル・アラバで合流し，アカバ湾の北端で紅海に接するアカバに通じている。アカバは若いニーファイにとって，大切な教育の場となったに違いない。なぜなら，アカバは金属溶解業と造船業の中心地であり，いずれも後日ニーファイにとって非常に役に立つことになったからである。

昔エジオンゲベルと呼ばれていたアカバは，当時砂漠の王国であったエドムの中心的な町であった。アカバはエルサレムと古代の紅海沿いの道を結ぶ唯一の街道上にあり，古代世界の文明と荒野の接点にあった。

読者はニーファイが「紅海の海辺に近い国境」に着いて（Ⅰニーファイ2：5），それから「三日の間荒野の中」を旅してから（6節）レミュエルの谷に達し，そこで天幕を張ったと書いているのを覚えておられるであろう。従って，この谷に設営されたリーハイの天幕は，昔のイスラエル領，当時のエドム人の領内にある産業の盛んな紅海随一の港湾都市からほんの3日路の距離にあったことになる。アカバを通って何度かエルサレムへ行く途中，ニーファイはアカバにおける産業技術を学ぶ機会を得ていたかも知れない。事実モルモン経は真鍮版を手に入れ，またイシメルを連れてくるため都合4度この地域を通過したと告げている。

しかしリーハイはアカバからどちらへ行ったのだろうか。もちろんアラビア半島全体が彼らの前に広がっていた。しかし118の既知の井戸を擁し，アラビアの紅海沿岸を南南東に走っていたのは，よく利用された香料の街道であった。私たちのこの研究に，教会歴史の一節が非常に明かるい光を投じてくれる。それは，予言者ジョセフ・スミスが，「リーハイは紅海のそばを南の大洋まで下り，この地（すなわちアメリカ）に渡ってきた」と言ったことである。（*Teachings of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 267）

紅海は厳密に南北の方向にのびているわけではないから，リーハイの一行は大体海外線に平行に「ほぼ南南東」に（Ⅰニーファイ16：13）向かって旅したのであろう。そしてイシメルがネホムで死んでから彼らは「ほぼ東の方へ」（Ⅰニーファイ17：1）方向を変え，多くの水のある所まで来た。

ニーファイが注意深くほぼ南南東にと言い，次にほぼ東にと書いているので，彼らの行き先であるバウンテフルの地の位置について相当確率の高い推測をすることができる。

ニーファイがこの地について描写しているように，そこには水，果物，船を造るための大木，草，野密，花，山，海岸線，深い海を見おろす崖，金属の鉱石があったに違いない。信じられないように思われるかも知れないが，ペリムからスルまで2,240キロにわたるアラビア半島の南岸で上記の記述に合う場所はたったひとつしかない。この場所は小さな湾を包むように彎曲した小さな鎌の形をした土地で，長さ45キロ，幅わずか11キロの土地であり，背後にはカラ山系が迫っている。1年の内3ヵ月間季節風の運ぶ雲が海側の坂に集まり，夏の間，靄，霧，雨が丘陵をおおう。この場所は，オーマンのサルタン領ドホファル州にある。この海岸からどちらに向かって進んでも不毛の土地がずっと続いている。繰り返して言うが，アラビア半島の海岸線をすみからすみまでくまなく捜しても，十分な雨量があって大きな木が育つ所はここしかない。しかも2千年以上ず

っとそうであったことが知られている。

私たちは次に古代のサララで交易が行なわれていた理由を知った。サララは乳香の木が自然に育つ唯一の場所であったのだ。今日では若木がイェーメンとアフリカ海岸のソマリランドに移植されているが，リーハイの当時サララは乳香をほぼ独占していた。

香料の街道の起点であり，アラビア海に面する土地の中で船を造れるだけの木材がある唯一の地サララは，一体バウンテフルであり得るのだろうか。私たちは地図を見たり，古代史をひもといたりして，リーハイがアカバからサララまで旅したと思われる経路を探ろうと努めた。

私たちは香料の街道の幹線が北緯19度の近くで東に向かっていることを知った。しかしリーハイの一行がナイランに到着してからも東に進み続けるためには，広大な不毛の砂漠の端に沿った香料街道ではなく，人のあまり通らない別の道を旅しなければならなかった。というのはナイランで街道は南に折れていたからである。多分一行はリアホナの指示に従ったのだろう。このようにして一行は，南方の異教徒の大国サバやその繁栄した首都（古代にマリブと呼ばれていた）それにハドラマウトの肥沃な谷を通ることを避けた。恐らくリーハイは，一行の中の気まぐれな分子がそこにある華やかな文明に誘惑されることを好まなかったのであろう。何年も小さな集団で生活してきてここで南方の大中心地に来れば，一行の一部の者はさらに旅を続けることを拒んだのではないだろうか。

このあまり利用されない東方に向かう街道では，井戸から井戸まで100キロ以上も離れている所がある。この街道は，一行が熱帯性あるいは亜熱帯性の楽園バウンテフルに到着するまでに経験したとニーファイが書いている恐ろしい艱難（Ⅰニーファイ17：1）をよく説明しているように思われる。

次に私たちは，この旅に要する時間を考えてみた。エルサレムからサララまで3,360キロである（図6参照）。らくだではどれくらいの速さで旅ができるだろうか。ろばではどうだろうか。ここで私たちはらくだ乗りのベテランで，元英国軍の将校サリム・サアドの助けに頼ることにした。ワジ・アラバに駐屯した彼は砂漠の大勢のベドウィン人と友達になっていた。荷物を載せたろばの隊商は6時間で32キロ旅ができると彼は説明する。また驚くべきアラブ史の蔵書の中から，あるらくだの旅行隊の例を引いてくれた。何千頭ものらくだで構成されるこの旅行隊はカイロからメッカへ向かう参拝団で，1日平均38キロ進んだと言う。

もうひとつ参考にできる数字は，聖書に登場する族長ヤコブが妻子たちを連れてパダンアラム（メソポタミヤのハラン）からギレアデの山地までらくだに乗って逃げた時の速度である。この時，一行は約600キロを10日（創世31：18－23）で移動している。1日平均60キロである。ところが怒った義父ラバンはこのヤコブに追いついている。つまり，同じ距離を7日で走破したラバンは1日86キロ移動したことになる。以上の数字を全部考慮して平均速度を出し

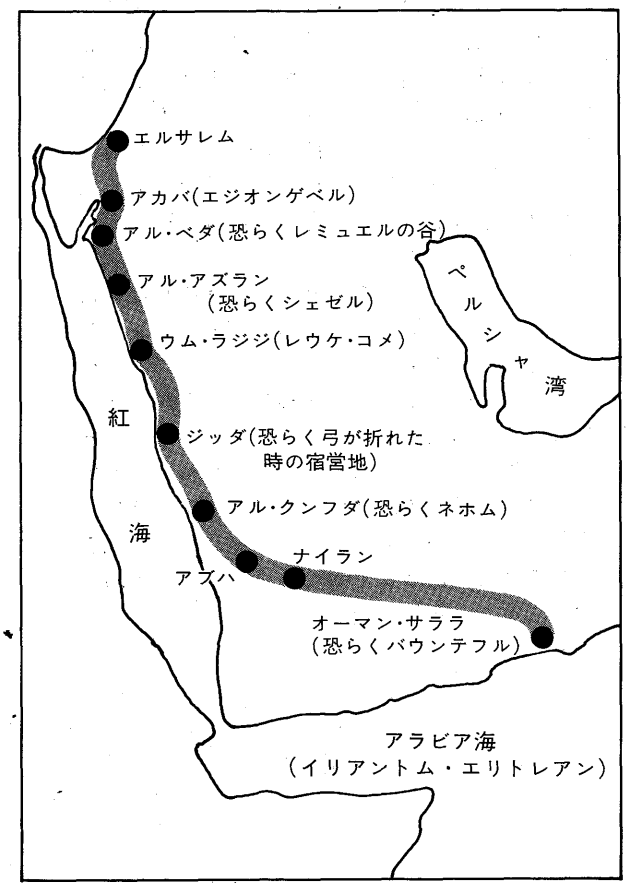
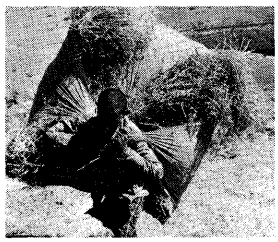
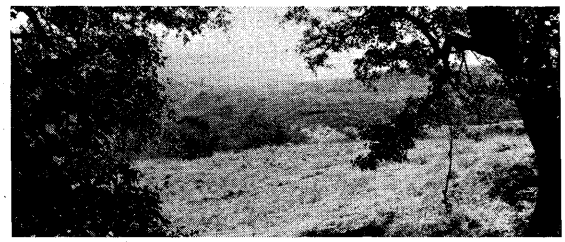
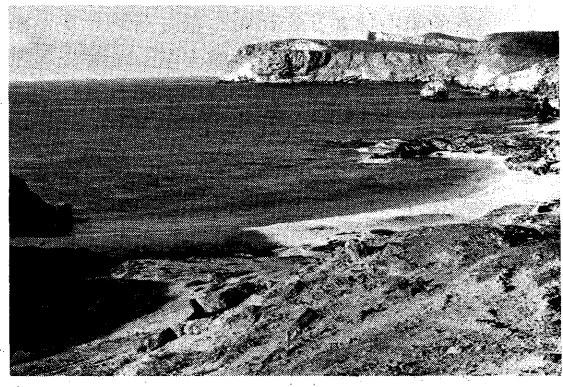


図6
リーハイが荒野を通って旅行したと考えられる経路
紀元前600－592年
（最初の地名は今日の地名で，括弧内はモルモン経，聖書，その他古代の出典による地名）







左上：冬のサララ。干し草の取り入れ風景。

右上：サララのカラ山地の斜面は周囲の砂漠と一変している。（バウンテフルの地と思われる）

右下：サララの海に面した絶壁。ニーファイの兄たちがニーファイを海の深みに投げこもうとした場所であろう。

て見ると，リーハイはどんな動物を使ったとしても1日38キロは旅行できたと推測することができる。言い換えれば，リーハイの一行は約90日でエルサレムからサララまで旅行できたはずである。しかしニーファイは，バウンテフルに到着するまでに8年かかったと告げている（Iニーファイ17：4参照)。8年間も何をしていたのだろうか。

初めから順を追って調べてみよう。一行はエルサレムを出るのにぐずぐずしていなかっただろうし，少なくとも1日20キロの速さで旅行したのではないかと考えられる。ということは，エルサレムからアカバまで8日から12日で移動したことになる。そこから一行は「三日の間荒野の中を」旅して，レミュエルの谷に宿営した（Iニーファイ2：6）地図やいろいろな出来事のあった場所を吟味して，私たちはこの重要な宿営地とみなされるオアシスはひとつしかないと考えた。それはサウジアラビアのワジ・エル・アファルにあるアル・ベダである。ここで一行は2年か3年忙しい年月を送ったと思われる。その間に息子たちは二度エルサレムに使いとして送り返されたことだろう。それぞれ片道に1ヵ月かかり，旅の前後に準備と休養の時間が必要であった。さらにエルサレムではレーバンとむずかしい交渉をし，また自分たちの金銀を集める時間が必要であった。そしてその後に真鍮版の教えを研究し，理解する日々が続いた。イシメルとその家族が合流すると，5組の男女の結婚の準備と，それに続く祝儀の時が必要であっただろう。

また，リーハイが作物を栽培して過ごしたということもあり得る。これは一行がレミュエルの谷を出ようとした時のニーファイの言葉にうかがわれる。

ニーファイは次のように言っている。「私たちは荒野へ持って行くべき一切のものと，主に賜わった食糧の残りとをことごとく集め，また荒野へ持って行くためにあらゆる種類の種子とを取った。」（Iニーファイ16：11）このために数年が経過するのは実に速かったものと思われる。

レミュエルの谷の宿営地は，リーハイが安心して休める地であったに違いない。彼は造船の地アカバから3日路の距離を異国のミデアンの地まで入っていたので，彼の命をねらう者がまだエルサレムにいても，彼らの追撃の手の及ばない所にいたと考えることができる。

最初の宿営地にしばらく滞在した後，少なくとも4組の結婚で結ばれたふたつの家族は（ゾーラムはイシメルの5人の娘のひとりと結婚した)，荷物をまとめて紅海の沿岸を南南東に4日旅して，彼らがシェゼルと呼んだ地に来た。私たちは地図を詳しく調べ，4日間に160キロは移動できたであろうと推測した。とすると，ワジ・アズランのアズランのオアシスに着いていたと思われる（図6参照)。これは一行が一時宿営したと考えて何らおかしくない地点である。

一行がシェゼルにどれ位滞在したかわからない。作物を植えでそれを収穫するまでの期間位はいたかも知れない。しかしニーファイは，程なくして再び南南東へ旅を始めたと語っている（16：14)。この度は狩猟に頼って食糧を得ていたようである（16：15)。なぜだろうか。収穫できなかったのだろうか。狩猟ではどんな獲物を見つけたのだろうか。いずれにしても，一行は「何日も何日も旅を」した後，しばらく野営し，休息を取って食糧を求めた。ニーファイはこの野営地の名前を書いていないが，一行にとってここは「試練の野営地」であった。と言うのは，ニーファイの鋼の弓が折れ，他の者の弓も「弾力がなくなった」(16：21）ため，家族が飢えに苦しんだからである。彼らは恐らくこの間作物を植えようとしたことだろう。ニーファイが主の指示に従って新しく木製の弓を作り，再び狩りに行ったことは，私たちの知るところである。

一行が同じ方角に旅して北緯19度に，あるいはその前後にあるネホムに向かうまでには，恐らくもう一度収穫期を迎えたことだろう。ネホムでの滞在は長かったかも知れない。というのは，一行の最年長者イシメルが死んだからである（16：34)。イシメルの体のためを思い，一行は旅を思いとどまったに違いない。また，天幕をたたんで旅を再開するまでに，喪の期間があったに違いない。ネホムにおける滞在について，ニーファイははっきり，そこに「しばらく」留まったと言っている（16：33)。

一行はネホムをたつと，「ほぼ東の方へ」向きを変え，イリアントムの海岸にあるバウンテフルに着くまで進み続けた（Iニーファイ17：1－5)。彼らはこれまで荒野で都合8年間過ごしてきたのであった（17：4)。そして，これからも何年かバウンテフルで過ごそうとしていた。この年月については何も知らされていない。私たちは鉱石を溶かし，道具を作り，船を造り，また航海に持っていく種子を収穫するのにどれ位時間がかかるか推測してみた。2，3年必要であっただろうか。定説となっている聖書の年代とモルモン経の年代の間に4年の誤差があるとしても，エルサレムは一行がバウンテフルにいる間に滅んでいたであろう。興味深いことに，リーハイは一行がアメリカに着く前にエルサレムの滅亡を確認する示現を見ている（IIニーファイ1：4。列王下25：2参照)。

以上で私たちの研究は終わった。私たちが構成した経路や年代によると，古代に最もよく用いられたオーマンのサララを起点とする香料の街道をリーハイが使ったことになる。この考えは，既知の水源や一行が移動した方角，それに確かに出会ったと思われる民の存在をよく説明している。

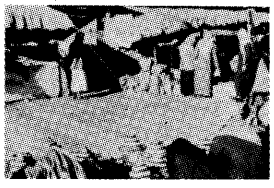
これで私たちは実際に訪れ，距離を測り，香料の街道の存在を自分たちの目で確かめ，バウンテフルの描写にあまりにもよく符合するこの歴史的な土地を調査して，仮説を吟味する用意ができた。こうして私たちはアラビアへ出発する準備を完了した。（次号へ続く）

☆　　☆

リーハイの道を現代の交通機関で行けば

ジェラルド・W・シルバー

リン・ホルスタインに述懐したまま



教会が組織されてから140年以上になりますが，あえて中東に渡り，荒野の中にリーハイの経路を再発見してその道をたどろうとした会員はまだひとりもいません。

エンサイン誌からその旅行をするように依頼を受けたヒルトン夫妻が，私に写真係として同行を求めてきました。ヒルトン夫妻はもちろんですが，私も教会にできるだけ豊富な情報を提供したいと思いました。

しかし私たちは数々の苦難が待ち受けていることを知っていました。アラブ諸国は外国人（特にアメリカ人とキリスト教徒）を国内に入れることを好みません。事実査証(ビザ）の入手は絶えず深刻な問題としてつきまとってきました。

ところが旅を続けるうちに，私たちの行なうことに主のみ手が及んでいることを感じ始めたのです。主はとても困難な状況にあっても私たちを助けて下さり，目的を全部果たせるようにして下さいました。

ヒルトン夫妻が選ばれたのは，彼らが中東，中でもアラブ諸国のことに明かるく，愛着を抱いていたからです。リンは過去12年間旅行代理店の経営者として，中東へ何十回も旅行団体を引き連れて足を運んでいます。ホープはアラビア語を学んでいました。そしてホープとリンはアラブ諸国の学生を援助する奨学金を創設していました。

私は以前にヒルトン夫妻をコロラド川下流の旅に案内したことがありました。ふたりが私に同行を求めたのは，写真を撮るためだけではなく，私が砂漠の中でも水のある所に案内できると思ったのかも知れませんね。

リーハイがイスラエルのエルサレムからサララ，オーマン（バウンテフルの地であると信じられている）と通って行った道をたどるには，反対の方から進まなければならないことがわかりました。と言うのは，アラブ諸国の中には，イスラエルを経由する外国人旅行者を入国させない国があるからです。

査証の問題は冒頭から難関でしてね。ホープは首都ワシントンへ出かけて行って許可を得るためにオーマンとサウジアラビアの大使とかけ合ったんですが，事態は思わしくありません。リンは親しいアラブの実業家に話しましたが，効果はありませんでした。

私たちは皆，当時十二使徒補助であったロバート・D・ヘイルズ長老から特別な祝福を受けました。その中で長老は，私たちが所期の目的をすべて果たせるように祝福して下さいました。

ともかく私たちは1月中旬に合衆国を発ったのですが，まだ両国に入る査証は入手していない状態でした。ヘイルズ長老の言葉を信じて，とにかく行ける所まで行くことにしました。エジプトのカイロに着陸した時もまだ，査証はありません。しかしその翌日，私たちはブリガム・ヤングが主の業について語った言葉が真実であることを悟り始めました。ブリガム・ヤングは「主の業を行なうために可能なことをすべて行なっていて，それでも達成できなければ，達成できるよう神に願うとよい。あなたがたにはその権利がある」と言っていますね。

私たちは相変わらず査証なしにオーマンのマスカットに到着しました。そしてひとりの英国人が同じ問題のために即刻飛行機に乗ってオーマンから出国するように命じられたのを見て，ああ，これはもうだめだと思いました。

私たちは懸命に祈りました。不思議なものですね。入国管理の係官は私たちの所に来ると，全く寛大な好意から，6日間オーマンに滞在することを許可してくれたんです。

後になってわかったことですが，当時戦場となっていたサララに行く計画であることをもし係官に話していれば，許可は決しておりなかったことでしょう。こうして私たちはサララへの第一歩を踏み出すことができたわけです。ある夜マスカットのホテルに戻る途中で，私はヘイルズ長老の祝福の言葉を思い出しました。彼は，アラブ諸国の同業者（報道関係者）と話をして，できる限り教会に好感を抱かせるように努めなさいと言われました。

翌朝早くリンと私はオーマンの情報相（テレビ，ラジオ，新聞担当）に会いに出かけました。すると情報相は合衆国大使から後援する旨の手紙が得られれば，サララに行くことができると言ってくれました。合衆国の係官はきわめて協力的で，早速手紙を用意してくれましてね，間もなく私たちは昔のバウンテフルであると思われる地に向かって出発することができたんです。

サララは美しい所でしてね。遠くに銃声が聞こえましたが，サララは平和そのものなんですよ。研究を進めていく中でわかったことですが，アラブ諸国の小さなこのサララの町は，リーハイが通ったと思われる頃からあまり変わっていないんですね。

もうひとつ幸運なことがありました。情報相がサララで

ひとりの若いアメリカ人と会えるように手配してくれたんです。このアメリカ人はサルタンの放牧場で働いていて，…この地域を詳しく知ってるんです。短い滞在期間でしたが，彼のおかげであちこちへ案内してもらって美しい写真を何枚か撮影することができました。

リンはオーマンで何とかサウジアラビアに入国する査証を手に入れ，ホープと娘のシンシアを先にジッダに行かせました。でも私はまだ査証がありませんでしたから，アラビアのダーレーンに着いた時にまたむずかしい事態が起こりました。直ちに国外に出るように命じられたので，私はすばやくフィルムをリンに手渡しました。そしてひとりバーレンという辺ぴな所に追放されることになったんです。

しかしこのことでよく祈った私は，当地のアメリカの係官から一通の手紙を入手でき，それをサウジアラビアの大使館に持って行きました。すると数時間して，スタンプを押したばかりの査証を入手することができたのです。アメリカにいた時，アラビアに入国する査証は絶対手に入らないと半年も聞かされてきましたからね。これはまさに奇跡でしたよ。

この時から私は，たて続けに幾つかの奇跡を経験しました。アラビアのダーレーンに戻るためにバーレン空港にかけつけたんですが，どの便も皆空席待ちでした。ごったがえした空港で，ある人は飛行機に乗るためにもう丸2日間も待っていました。そんな状態ですから，次の便に乗れる可能性はまずないですよね。

ところが，また祈りながら立っていると，切符を扱う業者が来て私の切符を取ると，何の理由もなく私の切符に空席待ち一番のスタンプを押したんですよ。その時飛行機に乗れるのはたったふたりでした。

こういったことがその後次々と起こりましてね。ダーレーンに着いてもまた空席待ちでジッダに向かわなければなりませんでしたが，ここの切符担当官も何の理由もなく，私の切符に空席待ち一番のスタンプを押してくれました。もちろんこの時も祈りましたけどね。

ジッダのホテルはほぼ年中何ヵ月も前から予約済みで，中には1年あるいはもっと前から予約済みの所もあって，部屋を見つけることは全く不可能でした。ところが，またおもしろいことが起こりました。ジッダに向かう機内で会ったジッダ出身のアラビア人が，泊まる所があるのかと聞くので，ないと答えたところ，「今晩私の所に泊まりなさい」と言ってくれたのです。

この人は信じられないくらい親切にもてなしてくれましてね。その夜はこの人の別荘に泊めてもらいました。翌朝，アブハまで飛行機に乗って行ってヒルトンの家族を捜そうとする私を，彼は飛行場まで送ってくれました。ここでもまた私は空席待ち一番の印を押してもらいました。

私はヒルトンの家族は私より2日前に着いていると計算していましたので，アブハに着いても一体どうして捜してよいものか全く見当がつきませんでした。ところがまた不思議なんですね。ジッダの空港ですわってこのことについて祈り，ふと目をあげるとヒルトン夫妻が入ってくるではありませんか。彼らも同じ便に乗ることになっていたんですよ。私たちは抱き合って大喜びし，笑ったり泣いたりというわけです。

そんなわけで無事アブハに着いたんですが，今度は当地の王子の許可が得られなければ，どこへ行くこともできないと言うんです。ところがそのかんじんの王子が町にいません。私たちは当地の歴史家ならいろいろ助けてくれるだろうと思って捜していた所，ホテルの経営者の兄弟に会うように勧められました。その人はアメリカでふたつ学位を取得した人で，王子の親戚でもあったんですね。彼はこの地方の歴史に通じていて，次の日から3日間彼の客として丁重に町を案内してくれました。

空港に着いてアブハを発とうとしていると，私が写真を撮っているのを見た役人がフィルムを渡すように求めてきました。幸いフィルムを入れ換えたばかりだったので，カメラをあけて，まだ2枚しか撮っていないフィルム1本を渡しました。はらはらしましたね。でも既に撮影ずみの5本のフィルムはポケットに入れていたので没収されませんでした。

やれやれと思ったら，今度は別の係官が私の大きな写真装具を見て，皆が飛行機に乗り終えるまで待っているように言うのです。背筋が凍る思いというのはああいう時のことを言うのですね。私は一生懸命に祈りました。きっとヒルトン夫妻も飛行機の中で祈ってくれていたことでしょう。

私は一点の疑いもなく聖霊がこの人を動かしたと確信しています。彼の表情に変化が出てきたように思ったんですよ。彼は近くに来るように合図し，旅券に目を通すと，飛行機に乗ってよい，と言いました。

私たちはヨルダンでベドウィンの古物商に立ち寄ったんですが，皮製の水袋，らくだの装具，マングースの皮で作ったオリーブ油の袋などがありましてね，リーハイが旅に携帯したものによく似てるんですよ。また写真もいいのがたくさん撮れました。

ヨルダンのアンマンでは，政府の情報相と会見して，教会の系図部がこの国の戸籍資料をマイクロフィルムに撮れるように交渉しました。

また西岸のイスラエル領におけるアラブ関係を担当している大臣とも会見して，その地域にあるアラブの記録を系図部が撮影できることになりました。

アラブの民にとって家族の記録は最も神聖なものなんですね。教会の方針で家族の記録を保存するように言われているということを説明しますと，彼らはいつも喜びの表情を顔に表わします。自分たちの記録が花崗岩をくりぬいた保管所に納められ，永久に保存されることを聞いて非常にうれしそうでした。

アラブの人たちは素晴らしい人たちです。性質は温和で，悪意がありません。福音を受け入れれば，数多くの奇跡が彼らの間に見られるようになるでしょうね。

国々の門戸が開かれて，今までで福音に接することのできなかった人々のもとにも宣教師が送られるように祈ろうとキンボール大管長が全教会員に呼びかけましたよね。私は今度の旅の間中ずっとそれを考えていました。

ヒルトン夫妻と私は，門戸が私たちに開かれ，人々が本当の目的を知らないのに私たちを入国させてくれたのを見て，会員の祈りが答えられているということを実感しました。主が道を備えて，派遣された目的を達成できるように助けて下さったんですね。

生のうつわ

ポール・エンリーケイ・ゴウメイス

これはぼくの話です。ぼくはまだ小さいころからよくおいのりをし，おいのりの力を知っていました。

5さいのとき，ぼくは大きなじこにあいました。でもそのことからぼくのあかしや，しんせきの人たちのあかしが強くなったことを知っています。

それは教会に入って2年たったころのことでした。ぼくの家族は，南アメリカのコロンビアに住んでいるのですが，クリスマスに合衆国からおばあちゃんがやってきました。

そして教会員でないおばあちゃんは宣教師からお話を聞いてくれることになりました。おばあちゃんは知恵のことばを受け入れることができませんでした。でも，宣教師が話したことは信じると言ってくれたのです。

4ヵ月くらいたったとき，おばあちゃんがバプテスマを受ける気持のないことを知りました。ぼくたちはみんながっかりしてしまいました。でもお祈りとと教会の勉強はつづけるとやくそくしてくれました。

6月のはじめのある日のことです。スクールバスで学校についたぼくは，左右をよく見ないで道路にとびだしてしまいました。

じこが起こったとき，ハロルド兄さんとジャッキー姉さんもその場にいました。兄さんは家にれんらくをとり，姉さんと学校の保健婦さんがぼくをバスにのせてくれました。そしてぼくは病院にはこばれたのです。

病院につくまで，ぼくは天のお父様のことを考えていました。お父様はぼくをお見すてにならないということが，ぼくにはわかりました。いたみがおさまったので泣くのをやめました。ぼくがあまり静かになったので，お姉さんもバスの運転手さんも，ぼくが死んだと思ったようでした。ジャッキー姉さんはひざまずいてお祈りしてくれました。「天のお父様，弟のポールを死なせないでください。心からおねがいいたします。イエス・キリストのみ名によって…」

お姉さんが祈り終わったときぼくは水がのみたくなりました。天のお父様の助けと，祈りの力によって，ぼくは死なずにすむ，と思いました。

病院につくと，すぐに手術を受けなければなりませんでした。ところがぼくは家でただひとり血液型がちがうのです。ぼくと同じ血液型の人はとても少ないので，さがすのがたいへんです。支部の人たちがお父さんやお母さんといっしょにあちこちさがして，やっと血液がみつかりました。でもそれがじゅんびできるまで，どんなに急いでも2時間半はかかります。

間もなくプライマリーの会長さんが来てくれました。会長さんはぐうぜんにもぼくと同じ血液型でした。会長さんのおかげで，ぼくはすぐに手術を受けることができました。

手術は4時間半もかかりました。お医者さんは，けががひどいのを見ておどろいたようです。

手術後，ぼくはお父さんと支部長のデュポント兄弟からしゅくふくを受けました。こうしてぼくはかいふくに向かったのです。その間，プライマリーの先生やクラスの友だちがなんどもおみまいに来てくれました。

今ではおばあちゃんも福音を受け入れ，家族の20人が末日聖徒です。ぼくはじこにあいましたが，そのことで家族を教会に導けたことは，ほんとうにうれしいことです。

ぼくのように教会に強いあかしをもってしあわせになれるように，子どもたちのためにはたらいてくださっている人々に心からかんしゃします。

それしか

父が夜ふけに帰って来た。ジョージはふとんをそっと持ち上げて，弟のジミーの頭ごしに父の方を見た。だんろのそばでうたたねしていた母がすぐに目をさまし，父に何かささやいている。つかれたような低い声がかえってきた。ジョージは，母が父のぬれたコートをぬがせるのを，じっとながめていた。母がコートを火のそばにかけると，父はいすにこしかけ，ブーツをぬいだ。はき古したブーツの破れ目から水があふれ，床をよごした。

母はだんろにまきをくべながらこう言った。「あなた，こんなにまで働くなんて。霧はこいし，とてもさむいわ。それにこのブーツじゃ。」

母は子供たちを起こさないようにと小声で話していたようだったが，ジョージには聞きとれた。

アイオワの大草原を昼夜かまわず吹き荒れる風は冷たい。ジョージは背中が冷えてきたので，弟にそっとよりそった。

「それしかないんだ，マーサ」と父は母に言い，せきこんだ。それからだまってぬれたくつ下をぬぎ，つま先をこすった。

ジョージは暗やみの中でふるえながら，ジミーの背中に顔をうずめた。父のせき，そして青白い顔と生気のない目にジョージはおどろいた。寒い中をぬれながら長時間働くことが，せきの原因なのである。

その日ジョージは妹のアマンダと父に昼食をとどけに行ったのだった。ふたりは深くて暗い穴のふちに立ち，じっと中を見ていた。父は穴の底でつるはしを土につきさし，ほった土を上にほうりあげていた。足首あたりまで水がたまり，ブーツや穴のまわりには氷がついていた。

「あと2，3日で終わりだ。そしたら荷馬車を買うお金が入るよ。」そう言って父はふたりを見上げた。

荷馬車！父は荷馬車と上等な雄牛を買い，シオンに行こうとしていたのである。ヤング大管長から，何もかもおしみなくささげるなら，シオンに行くことができ，家族はしゅくふくされると約束されていたのだった。だから子どもたちも，荷馬車を手に入れることがどれほどたいせつかを知っていた。

ジョージとアマンダは昼食を下ろすと，穴のふちにこしをおろし，歌をうたいはじめた。父はふたりのそんな姿をにこやかに見ていたが，急にせきこんでしまった。

ふたりはどうしていいのかわからず，顔を見あわせ，父が「だいじょうぶだ，ちょっと熱があるだけだ，すぐによくなるさ」と言ってくれ

ないんだ

るのを待つしかなかった。

その夜，ジョージは天のお父様に祈った。「天のお父様，お父さんをはやく元気にしてください。そして井戸ほりが終わりますように。」そして目をとじ，ねむりについた。

次の朝，アマンダに起こされた。口に指を当てて，静かにと合図した。

母は父の朝食のおかゆを皿にとり，スプーンを下におくと，ふるえながらハーハー言っている父の毛布をまくり上げた。アマンダは弟のジミーに服を着せ，顔をあらってあげた。それから子供たちはだまって朝食を食べた。

そのとき，母が声をふるわせて言った。「お父さんの熱が下がらないの。きょうは井戸ほりに行けそうもないわ。」

「でも，お母さん」アマンダが言った。「お父さんはあと2，3日で終わるって，そしたら荷車馬が買えるって言ってたわ。私たちどうしたらいいの。」

母は首をふった。そのときジョージが，「ちょっと出かけてきます」と言って，オーバーコートを手に取った。

母はきょとんとしていた。

「たきぎがもっといるでしょう。」そう言って，ジョージは外に出た。風はようしゃなくふきつけ，空の雲はまるではけでなでたようだった。冷えこむ朝だった。ジョージはしばらく立ち止まっていたが，やがて風の中をジョセフ・ハーカーさんの農場へ向かった。

「どこへ行くの？」アマンダがスカートをひるがえしながらついてくる。

「おまえには関係ないよ。」ジョージは足をゆるめずに答えた。

「関係なくないわ。井戸に行くんでしょう。」

ジョージはふりむいた。

「ねえ，そうでしょう。お母さんは知っているの？」

アマンダはジョージにおいつこうと，ほおをまっかにして走ってきた。

「お母さんに言ったら，行かせてもらえないよ。それに，井戸ほりが終わらなかったら荷馬車は買えないんだよ。」

アマンダは止ち止まった。「ひとりじゃほれないわよ！」

「できるさ！」ジョージは言った。

「助けなしではできないわよ。」

ジョージも立ち止まった。妹の言う通りである。ジョージは12さいにしては背が高かったが，ほった土を上にほうりあげることはできない。

「手伝うわ。」アマンダはそう言って，先に走

り出した。

ジョージはくちびるをかむと，走っていく妹の姿をじっと見ていた。アマンダは10さいとは思えないほどたくましかった。ジョージは妹を連れて行くことにした。走りながらジョージは，ほり終わったときの母の顔をうかべていた。きっとできる！

「ぼくがほらなくちゃならないんだ」ジョージは心を決めた。

間もなく，ハーカーさんの農場が見えた。父の重いつるはしと大きなシャベルがハーカーさんの家畜小屋のかべにたてかけてあった。

「重いな！こんなの初めてだ」

そのとき耳もとでだれかがささやいたような気がした。「私が助けよう」と。

井戸についたジョージは，ロープを使って穴に入った。足を地面につけると，つめたい水がブーツの上まであり，ジョージは思わず息をのんだ。そしてつるはしをつかむと，助けを求めて心からの祈りをささげた。

ジョージはほった土をバケツに入れ，それをロープに結び，ロープの先を妹になげた。しめって重い土のはいったバケツを引き上げるアマンダを，ジョージは心配そうに見上げていた。

「ものすごく重いわ」

「おまえにむりだっていうことはわかっているよ」ジョージの声はふきげんだった。くたくたにつかれ，今にもなみだがこぼれそうだったからである。

アマンダはくちびるをきゅっと引きしめると，「私，できるわよ！お兄ちゃん，しなくちゃいけないの」と言った。

ジョージは自分をはずかしく思った。妹はひっしでやっているのに，井戸のかべがごつごつしているので，バケツがつかえてしまうので

ある。

「アマンダ，ごめんよ」ジョージはあやまった。それから静かに言った。「天のお父様におねがいしよう。きっと助けて下さるよ。」

妹はうなずき，その場にひざまずいた。ジョージは立ったままで頭をたれた。その間風は静まり，そばの木でこまどりがさえずるのが聞こえた。

すると，とつぜんアマンダが立ち上がり，「こうすればいいんだわ」とさけんだ。

ジョージは妹がもどってくるのをじっと待っていたが，体がひえてきたので，いたみをがまんしてつるはしをふりあげた。と，どしんという音とともに，土と雪が落ちてきた。見上げると穴に木の枝がわたされていた。

アマンダは穴をのぞきこんで言った。「じょうぶな枝を見つけてきたわ。動かないように両はしをよくとめるから。ロープをなげてちょうだい。」

ジョージは言われるままにした。間もなく枝をつかった間に合わせのかっ車ができ，ジョージが自分でバケツを持ち上げることができた。アマンダは上にあがってきたバケツの土をあけた。

「これはいいわ。」妹はさけんだ。ジョージはほほえんだ。

ふたりはひっしで働いた。ジョージの手はまめだらけになり，足はひざから下はかんかくがなかった。

お昼になると，ジョージはロープをつたってゆっくり上にあがってきた。そのとき，むこうから母とジミーがやってくるのが見えた。いっしゅん，ジョージには，母がおこっているように見え，悲しくなった。穴にもどりたいと思った。

母は包みを下におくと，ふたりを見つめた。それから井戸をのぞきこむと，うなずきながら，「よくやったわ。あとは石をつむだけね。お父さんもほめてくれるわ」と言って，ほほえんだ。

「お父さんもお母さんも私たちがここにいたのを知っていたの？」アマンダは目をまるくして言った。

「だってジョージがたきぎを持ってこないんですもの。」

「きっと集めていくよ，お母さん。」ジョージは言った。

「帰りがけに私が集めていくわ。」そう言って，母はジョージの肩にやさしく手をおいた。「さあ，包みを開いて，食事の祝福をしてちょうだい。」

昼食後，穴ほりをはじめる前に母はこう説明した。「お父さんの話だと，水の層がたくさんあるので，そこに石をつんで水が土をくずさないようにしなければならないそうよ。そうしないと，かべがくずれてしまうんですって。」

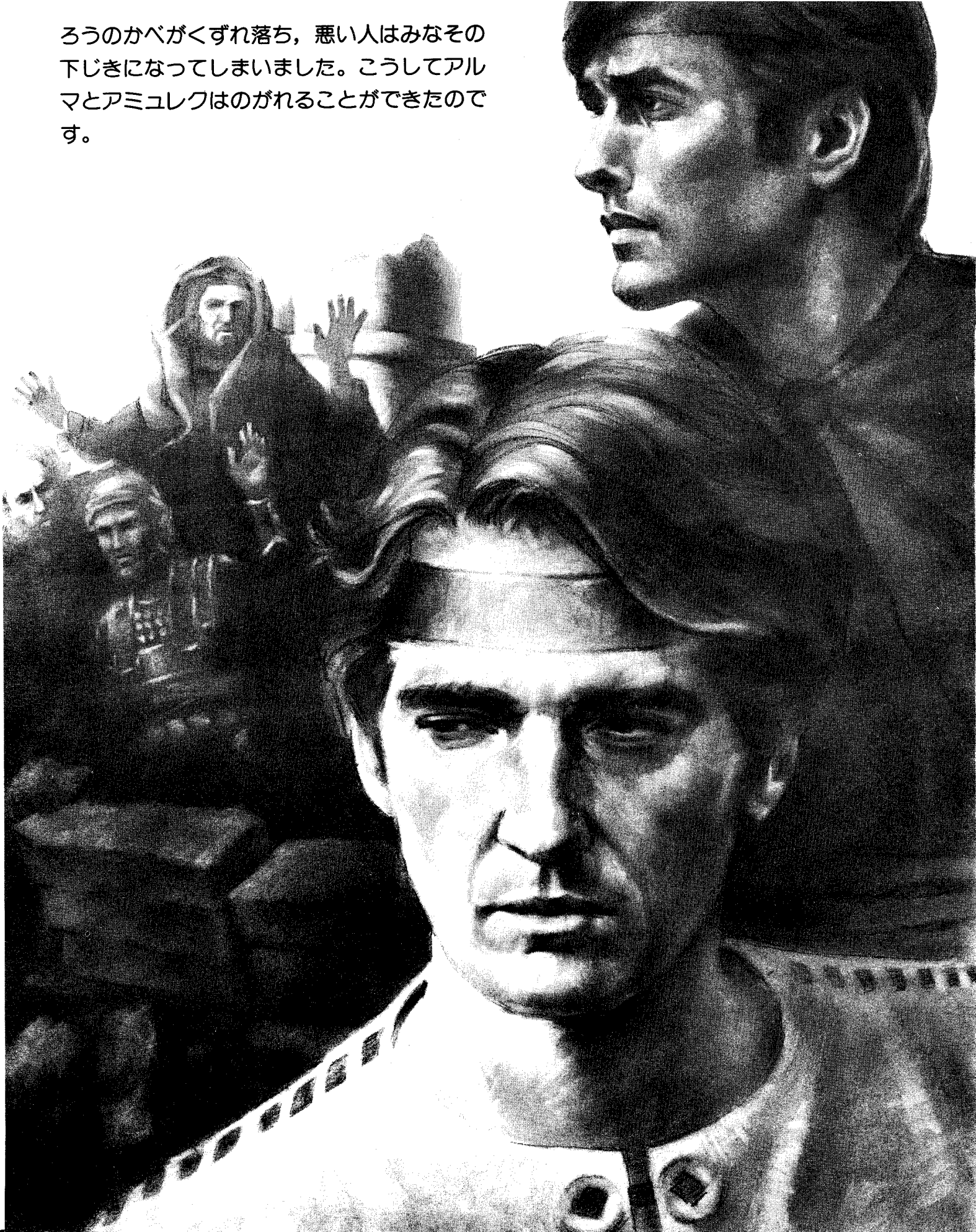
「お母さん」ジョージは言った。「それほど遠くない所に採石所があるの。ハーカーさんに荷馬車をかりて，必要なだけもってくるよ。」

「でも，お父さんは助けられないのよ。とう分休ようが必要だわ。だいじょうぶかしら。」

「天のお父様に助けていただくわ」アマンダはこう言った。

「そうだよ，お母さん。」ジョージは答えた。「それしかないんだよ。」

ろうのかべがくずれ落ち，悪い人はみなその下じきになってしまいました。こうしてアルマとアミュレクはのがれることができたのです。



アミュレク

マーベル・ジョンズ・ガボット

アミュレクがアモナイハ市の南にあるわが家に急いでいると，つかれてよわっているひとりの男の人に，「神のしもべに何か食べ物を」と呼び止められました。

そこでアミュレクはこう答えました。「私の家に来てください。私はニーファイ人です。あなたのことは天使から聞いています。」

神のしもべは食事がすむとこう話しました。「わたしはアルマという者です。神の教会の大祭司です。この町で何日も福音について話してきたのですが，人々は私をわらい，打ち，この町から追い出そうとしました。そのとき天使から，南の門のところへ行って，もう一度行なうようにと言われたのです。」

アルマはアミュレクに神の道を教えました。そしてふたりは神のみことばを人々にのべ伝えるために出かけて行きました。

アミュレクはアモナイハ市のお金持ちで，人々からしんらいされていました。アミュレクは人々の前に立つと，アルマは神の予言者で，私は天使からこの人を家にむかえるように言われた，とあかしをのべました。

人々はあっけにとられてこの話を聞いていました。わるがしこい法律業者のひとりゼーズロムは，お金でアミュレクに神はいないと言わせようとしました。

するとアミュレクは，「神はたしかにいらっしゃる。しかしあなたは神よりもお金を愛している」と，ゼーズロムに答えたのでした。

アミュレクがこれほどの力をもって語っても人々の心は変わりませんでした。そしてアミュレクとアルマをとらえて，しばりあげました。またゼーズロムが心を改めて，アルマとアミュレクをべんごすると，人々はゼーズロムにつばをはきかけ，町からおい出してしまったのです。

人々の心はますます悪くなり，神聖な記録を火に投げこんだり，神のみことばを信じる人々を火あぶりにしたり，何ともひどいものでした。

その火がもえつきると，高等判事がふたりの前に立ち，ほおをピシャリと打ち，こう言いました。「これでもまだ民に教えるというのか。」

ふたりは何も答えません。ろうに入れられても答えようとはしませんでした。何日も，食べ物も水も与えられず，しばられたままでした。

ついにアミュレクとアルマは主にさけびました。「私たちがキリストを信じる信仰に応じて力を与えたまえ。」

すると，地しんがおこり，ろうのかべがくずれ落ち，悪い人はみなその下じきになってしまいました。こうしてアルマとアミュレクはのがれることができたのです。

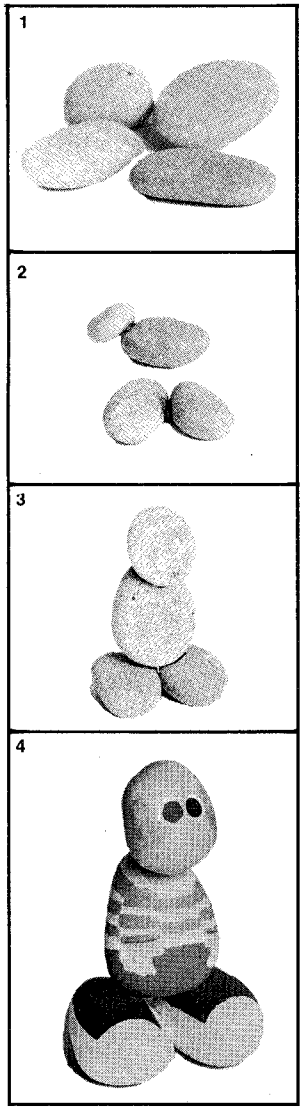
アモナイハ市を去るとき，ゼーズロムがひどい病気であることを知ったふたりは，ゼーズロムに会いに行きました。ゼーズロムがキリストを信じているので，ふたりはその信仰に応じて病気がなおるようにとしゅくふくを与えました。するとゼーズロムは元気になり，アルマからバプテスマを受けました。

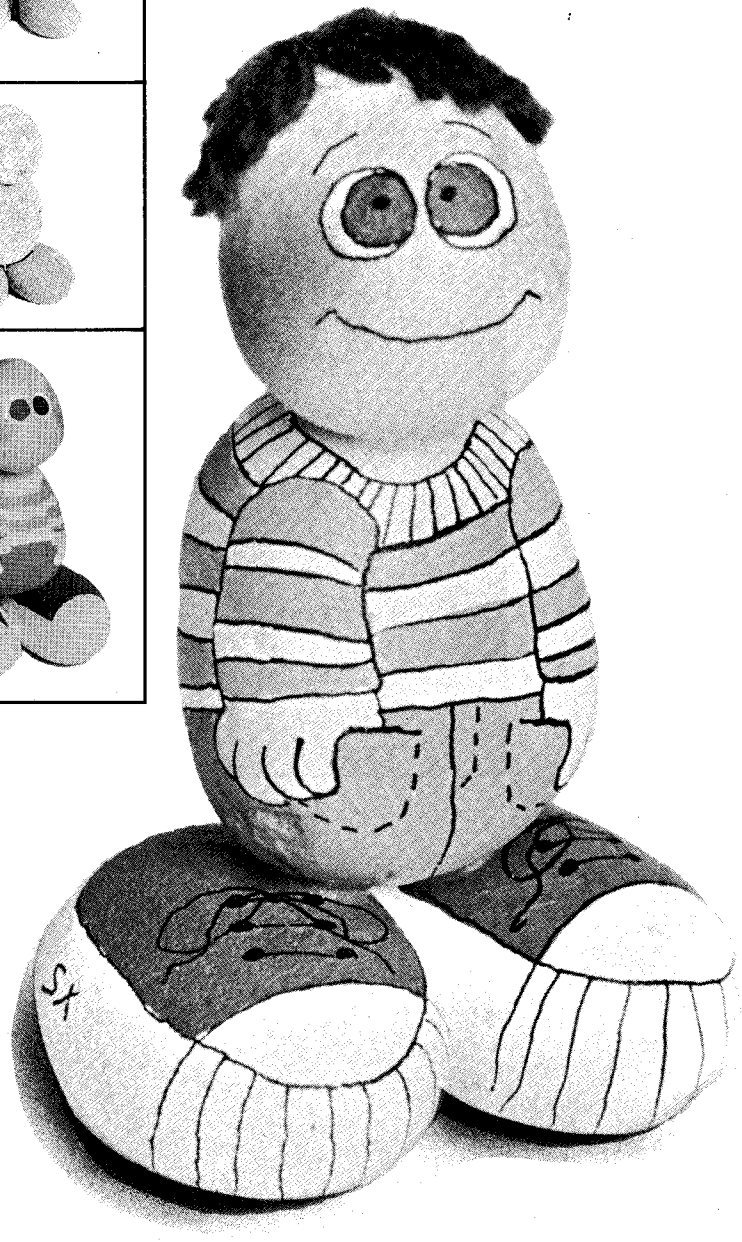
その後，アミュレクはアルマといっしょにゼラヘムラの地へ行き，主のためにねっしんに働きました。

小石のにんぎょう

カレン・シャープ

ざいりょう：なめらかな石，
絵の具，せっちゃくざい，黒のフェルトペン，毛糸，フェルト





1．なめらかで，たまごがたの石を集めます。砂浜や川岸で見つけられるでしょう。じゃりの中にもあります。

小さめのたまごがたの石で同じ大きさのものふたつを足に，大きい石はどう体に，小さいまるい石を頭に使います。

石はブラシでよく洗い，布でふきます。

2．ふたつの石をならべてせっちゃくざいでつけ，足を作ります。どう体に頭をつけます。頭はどう体の前よりにつけ，かたの線をだします。（図を見る）

3．足と首のせっちゃくざいがかわいたら，足の上にどう体をつけます。かわくまで動かないように支えておきます。

4．せっちゃくざいが完全にかわいたら，初めにはだ色をぬり，次に服やくつなどをぬります。（図を見る）

5．色のさかい目は黒でりんかくをとります。笑っている口やまゆ毛，うで，足などをかきます。

毛糸をてきとうな長さに切り，頭につけて，かみの毛を作ります。

完全にかわいてから，両方のくつの底をぬります。フェルトを切ってつけるのもよいでしょう。

スペイン語の声

ルイス・エスピノサ

私は教会に入る前から日記をつけていましたが，自分の家族を教えたり励ましたりする神聖な経験を記録として残すという意味で日記が本当に役立つことを確信したのは，1968年のある特別な経験からでした。

私はそれより6年前にチリで教会に入り，その後ユタへ引越して，クレリヤという素敵な女性に出会い，彼女と結婚しました。1968年当時，私は学生で，息子のルイスは3歳でした。

ある意味で，私たちは迷っていました。自分たちの目標や問題をどうして解決したらよいかということがはっきりわかりませんでした。ふたりで断食をして祈りました。私はある朝，ひげを剃りながら自分たちのかかえている問題を考えていました。何らかのみたまの導きが欲しいと思っていました。その時はきっと心の波長が合っていたのでしょう。私はスペイン語で話しかける声を聞きました。その声は問題を具体的にどうしたらよいかはっきりと教えてくれて，その解答を生活に生かしていくために，福音の原則の中でこれを理解し，どのように実行しなければならないかを明らかにしてくれました。

それと同時に，明らかにされたこの解決法を妻にも教えなければという強い気持ちに駆られました。私は泡だらけの顔のまま，浴室を出て叫びました。「今すぐ話したいんだけど！」それまではっきりしなかった幾つかの原則を，非常に明瞭に妻に説明できたことも，その朝受けた祝福のひとつだと思います。自分たちの家族にかかわる原則と，教会でそれまでに聞いていた家庭の夕べについての勧告がそれです。このことはその後の私たちの生活に大きな影響を及ぼし，現在まで，家族内の問題ということだけでなく，天父が私たちを見守って祈りを聞いて下さることを思い出させてくれる出来事として，霊感の源となっています。

今日記に書いてあることを読むと，その場で感じたと同じような感動がよみがえってきます。ヒュー・B・ブラウン長老はこう言われました。「ひとりでいる時に，私はしばしば，新鮮，明瞭に語られる真理を聞く。それは飾らず，訳されず，言葉で告げるものではなく，ただ心によってのみ聞かれる。原語で自分の内面から語る。私は自分がそれを地上にもたらしたことを知る。それはついぞ教えられたことのないもので，人に上手に教えることもできない。」（*Eternal Quest*「永遠の探求」p. 435）

私の経験はこのようでした。真理の声が自分に話しかけていたように感じ，快い気持ちがして，平安を感じました。それが真実であることがわかりましたし，今でも日記を読み返すたびにそう感じます。

私は普通は英語を使っているのですが，その時の霊感が母国語のスペイン語によったことがそれ自体私にとってはひとつの霊感でした。確かにみたまはあらゆる言語を自由に使います。

恐らく祈りの答えが非常にはっきりとして大きかったためでしょう。それを言葉にするのは恐れ多い感じで，当時つけていた日記にもそのことを何ヵ月も書かずにいました。

そんな時に，何年も前の丁度バプテスマを受ける前に経験したもうひとつの霊的な出来事を思い出しました。でもその経験も日記に書かなかったので，もう細かい部分があやふやになってしまっていました。息子に教えたかったのですが，記録していなかったためにそれができませんでした。

私は今度受けた祈りの答えについては二の舞いを踏むまいと思いました。しかしその話を日記に書きながら，知らないうちに細かいことを少し忘れてしまっているのに気づきました。たった数ヵ月前のことなのに，なかなか思い出せないのです。もっと長い間書かずにいたらどうでしょう。今私の家には，主が私たち家族を愛しておられることをつづった記録があります。一緒に何回もその記録を読み返し，それぞれがそこから導きを受けています。

11歳の息子はこの5年間自分の日記をつけています。一生の記憶を座右にとどめておくのに良いスタートだと思います。日記に残る彼自身の過去は，現在の力，将来の指針になることでしょう。

なかなか読めないのなら……

オクラホマステーキ部
アニタ・ミラー

私は福音に関してはとてもおうように育ちました。家庭に神権者はいませんでしたし，一生懸命に福音を勉強しても，実際に試練がやってくると福音の標準を守ることができずにいました。

夫は教会員ではなく，長い間私たちの家庭には福音が根づいていませんでした。教会のことを話し合おうとするといつも誤解や緊張が生まれるので，意識的に避けていました。

私はそんな家族のとげとげしい雰囲気がいやで，5年前に，それをどうにかしようと決心したのです。ちょうど夫がベトナムに従軍した時でした。息子が4歳だったので，初等協会に行かせることにしました。そうするうちに日曜学校や聖餐会にも行くようになりました。でも教会に行ってもあまり居心地よくありませんでした。知らない人が大勢で，だれも私たちのことを特に気にとめない様子でした。ただ一家族だけは違いました。その家族は私たちを食事と家庭の夕べに招待して下さいました。私はやっとその経験から，自分の家庭に欲しいと思いながら欠けていたものがあることを知りました。

私は休暇で帰った夫に，自分にとって教会がどんなに大切か，また自分は教会をどれほど信じているかを話し，一度一緒に教会に行ってくれれば二度と言わないからと言いました。

夫がベトナムから帰還すると，私たちはケンタッキー州に移り，そこで教会に通い始めました。夫のリッチは穏健な反対派とでも言うのでしょうか，たいていの教師ならどこか別の場所で，せめて別の機会に聞いてほしいと思うような質問ばかりしました。私は次の転勤の時には，末日聖徒が周囲に大勢いる土地に行きたいといつも祈りました。リッチがモルモンと親しくなるようにと心から思ったのです。一生懸命にそのことを祈りました。

やがて転勤の辞令が出て，オクラホマ州のスティルウォーターに行くことになりました。私は3日間泣き通しました。オクラホマにはモルモンがいないと思ったのです。でも，主はみこころのままに事を運ばれます。オクラホマでも私たちはまた求道者のクラスに出席して，今度はホームティーチャーが来て下さることになりました。

決定的な変化があったのは，1970年1月のとても寒い晩でした。1970年こそは教会の年にしようと心に決め，もう中途半端なモルモンはやめにして完全なモルモンになりたいと思いました。そこで年頭の月曜日の夜（当時，扶助協会は月曜日に行なわれていました），厳しい寒さの中を出かけました。リッチは「行かないでくれよ，お願いだからさ」と言いましたが，私は「行かなくちゃだめなの。今行かなかったら，もう行けなくなるわ」と答えました。

教会に着くとがっかりしてしまいました。ほかにだれも来ていなかったのです。でも間もなく3人来ました。会長会の人たちでした。やがて7人になりました。みんなが私を歓迎して下さいました。証会があって，私を除いて全員が証をしました。部屋の中に目をうるませない人はひとりもいませんでした。私は家に着くが早いか，教会で感じたことを夫に話して聞かせました。

このことから私は扶助協会が大好きになりました。約半年の間，一度も欠席しませんでした。そうしたある日，レッスンの最後の証の後でひとりの姉妹が，「モルモン経がなかなか読めなければ，ニーファイ第3書から始めてごらんなさい。」と言いました。

私は，「そうね，大変なのね。読み始めることさえできないのだから」と思いました。

その夜帰宅してから，私はニーファイ第3書を開いて全部を読みました。当時私たちはふたりとも学生でした。私はニーファイ第3書を読み終えると，別の部屋で勉強していた夫のところへモルモン経を持って行きました。

そして夫にモルモン経を渡してこう言いました。「ここのところを読んでみて下さらない。こんなに素晴らしいこと，今までに読んだことないと思うわ。」

彼は，「冗談だろう。こんな夜中に」と言いたげに私を見ました。

でも彼はニーファイ第3書を読みました。11章を読んで感動しない人がいるでしょうか。

「群衆はその意味が解って天を仰ぐと，天から一人の男の方が降りたもうのが見えた。このお方は白い衣を召して，降ってきた群衆の中に立ちたもうた。群衆の目はみなこのお方の上に注がれたが，互いに物を言う勇気がなかった。みなは自分らに現われたこのお方を天使であるとは思ったが，そのお方が降りたもうたわけは知らなかった。

時にそのお方は手を伸して群衆に話しかけて仰せになった。

『見よ，われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。』」（8－10節）

この書がきっかけになり，夫はモルモン経を全部読みました。また私も読みました。私たちはそのほかにも教会の本を読み，祈り，家庭の夕べを始めました。それから半年もしないうちに夫はバプテスマを受けました。そして1年後に自分で息子にバプテスマを施しました。それは，私にとって一時は無理だとあきらめもした夢でした。1972年に，私たちは神殿で家族の結び固めを受けました。

私たちを幸福の道に導いてくれた聖典に対して，私がどんな思いでいるかとうてい口では言い表わせません。

私たちはさまざまな理由から正しいことを行なう。単に,悪いことをして罰を受けたくないからという理由で,正しいことをする人もいる。だが,私たちが,何か罰を恐れて正しいことをする場合,私は,その根拠はきわめて不安定なのではなかろうかと思う。「私は,正しいことを行うようにずっと教えられてきたから,正しいことをするんです」と言う人もいるかもしれない。だが,そのような理由づけも,他人の話の上に,人の証の上に成り立っているのであって私には,それよりもっと成熟する必要があるように思える。私が思うのは,私たちは,他人の証に頼るのではなく,自分自身の証を持つ必要があるということである。「ただ私の両親を喜ばせたいから,正しいことをしたいんです」と言う人がいるのも聞いている。私たちは皆,自分の両親を喜ばせたいという希望は持つべきではあるけれども,その理由だけでは,永遠を通じてずっと私たちを支えきることができないのではないかと思う。ただ主の戒めに従順でいたいから,正しいことをしているんだ,と言う人がいるのも聞いていよう。これはこれで,極めて高い,貴い目的である。もちろんこれには,その従順が個人的な確信を伴わない盲目的な従順ではないという条件がつく。私にとって最もふさわしいと思われる理由は,天父に栄光を加えたいということである。私たちがどのような動機から行動を起こそうと,私は,最終的には,個人個人の証をもってこれを補足する必要が

重荷を主にゆだねなさい

七十人第一定員会会員
ロバート・L・シンプソン

あると考えている。私たち個人個人の証は，福音の学究と理解という基礎の上に成り立つもので，この証は，私たちを己を捨てて奉仕する生活へと導くものだからである。そしてその証の最も清められた状態というのが，主の大いなるみ名に栄光を加えたいという理由から福音の諸原則に従って生活しているのだ，という崇高な思いを抱いた時なのである。

「見よ，これわが業にしてわが栄光，すなわち人に不死不滅と永遠の生命とをもたらすなり。」（モーセ1：39）この聖句は，一文にして，あらゆるものが創造された目的を端的に言い表わしている。私は，まだ若い頃，神がいまだに永遠の進歩を続けているなどということはありえないことではないだろうかといつも考えていた。どう見ても神は完全な御方だし，全智全能の御方，あらゆるものを克服された御方であるはずだった。だがこの聖句を理解できたので，今は神がさらに栄光を受け，さらに昇栄することがおできになることを知っている。事実，それは子供たちの成功によって増し加えられるのである。私たちが失敗すると，神の可能性を狭めることになる。私たちが義しい努力をして成功した場合，神のみ名に栄光が加えられるであろう。これこそ完璧な動機と言えないだろうか。利己的な意図の微塵もない，完璧な動機なのである。

悔い改めの必要性

私たちは生活を通じて，この世の生涯の目的は克服すること，すなわち神のみ前で耐えられないような資質を克服することである，と教えられている。私には，私たちが自分で判断ができるのではないだろうかという思いが，いつも心をよぎっている。人は，自分自身のやり方を続けたいと思うものであり，慣れ親しんだ生活様式の中で生活したいと思うものである。そうであるならば，霊に生命を与えてくれた天の父母のみ前で，気楽にくつろぎたいと思わないだろうか。自分の行きたい所に行けないというのは，いつの時でも最大の失望ではなかろうかと思う。計画は明らかである。私たちが近づこうとしている父なる神は，はるかに高いみ座におられる。そして，私たちにとってこの地上において最も差し迫った仕事というのは，聖なる主のみ前に二度と出られなくなるような思いや行動に打ち勝つことである。そのために悔い改めという大いなる原則がなかったとしたら，私たちの中で，ひとりでも昇栄や永遠の生命に到達できる者がいるかどうか，疑わしいと思う。

救いの計画が正式に提示された時，また，あらゆるものには反対のものがおかれると決定された時，そしてまた，全人類に自由意志が与えられることになると決定された時，神はその時点で，何か修正する過程が必要となろうということは知っておられた。罪の重荷，悪習，誤った選択などを修正することにより，償うことができるからである。神はこの過程のことを悔い改めと呼ばれ，またこの悔い改めと表裏一体の関係にある，赦しというものも備えられた。高慢，傲慢，利己心といったものはすべて，悪魔の小道具であり，悔い改めを妨げる重大な要因となっている。

偉大な概念というものは，ことごとく簡潔な公式で表わされるものである。例えば，アインシュタインの相対性理論も，$E=mc^2$ といった簡潔な公式で表現されている。悔い改めの簡潔な公式は，教義と聖約の中に書かれている。「人罪を悔い改めしや否やは，見よ，彼は自らこれを告白しその罪を捨つべ

ければ，その悔い改めたることはこれによりて知るを得べし。」（教義と聖約58：43）「告白し，捨てる」ということは，高慢，傲慢，利己心といった拒否的な雰囲気の中では，極めて到達しにくいものではあるが，信仰，愛，謙遜，勇気といった枠の中にいれば，可能なことである。

悔い改めの過程

監督のところへ出される問題の大部分が，監督ひとりの手によって，静かに，内密に，しかも慎重に処理されていることには，あなたたちも気づいていることと思う。監督はほとんどの場合，監督法廷を招集する必要性は感じないものである。

問題の重大性に応じて定められる試しの期間の後には赦しが待っている。それと同時に，あらゆることが同意された条件どおりに進められているかどうかを見るために，通常監督は定期的に確認をする。その上で，最終的には，その会員は，新しく見つけ出した自由というものの中で新たな安らぎを感ずることができ，力の限り，そうした問題を排除しようと努めるのである。それ以上の重荷が課せられることもなく，昇栄への道を妨害する障壁も取り除かれる。新しく平安な気持ちが病んだ心にとって代わり，かつての偽善者の感情も，すがすがしい良心にとって代わられるのである。

重大な罪の場合，法廷の聴聞が必要なこともあるが，その時でも，その手続きは親切で，暖かいものであると，約束しておこう。教会の法廷制度は公正である。これまで数多くの場所で述べられているように，教会法廷は愛の法廷であって，ただただ，教会員が再び正しい道を歩み始める手助けをするという目的以外，何もないのである。天父の手を下したもうたものの中で，その子供たちを陥れようとするような計画はなにひとつない。あらゆることが，私たちの進歩を助けるために計画されたのであって，決して邪魔をするためではないのである。私はここで，私が個人的に知っている人々を少し紹介してみたいと思う。この人々は，教会から破門はされたが，再びバプテスマの水をくぐって教会に戻り，歩むべき道を見いだして，その祝福を皆ことごとく回復してもらった人々である。彼らは今では，確固とした基盤の上に自分を築いている。神権者が適正な鍛練の場を与えてくれなかったら，私はこの人々が，今築き上げているような新しい自信に満ちあふれた心境に到達できていたかどうか，はなはだ疑問である。

教会法廷制度

教会の法廷制度について本当に理解している教会員は，比較的少ない。そのため，あなた方が，主の方法に信頼感を抱くことができるよう，私の心の中にあることを，少しお話ししてみようと思う。

多くの人の心の中には，教会法廷に対していわれのない恐れがあるが，これこそ悪魔のねらっている所である。悪魔というのは，人が物事を正しく判断する道からそれたときに，勝利を収める。それが悪魔の側の勝利なのである。不幸なことに，教会員の多くは，監督法廷や高等評議員会法廷が叱責の場であると考えている。だが，これは正しくない。こうした法廷というのは，必要な手順の一部なのであって，これがなかったら，人が望んでいる気高い永遠の目標に到達できない人々が大勢出てくることになる。

監督法廷について，手短かに述べてみよう。まず，監督との内密の面接で重大な背罪行為が明らかになった場合，監督は，監督法廷の招集を決定する。法廷は，ワード部監督会の3人で構成される。ここでは，そのワード部に籍を置くいかなる会員の破門についても審議することができるが，メルケゼデク神権者はその対象からはずされる。しかしながら監督法廷では，メルケゼデク神権者を含むワード部のいかなる会員に対しても，正会員資格の剝奪，あるいは判決猶予の決定を下すことができる。一方高等評議員会法廷は，ステーキ部長の指示の下にあって，ステーキ部長会と高等評議員会会員によって構成される。この法廷は，そのステーキ部に居住するいかなる教会員からも聴聞する権限を持ち，アロン神権者に対しても，メルケゼデク神権者に対しても裁判権を行使することができる。そして妥当であるならば，破門の決定を下すこともできるのである。

教会のあらゆる法廷は，通常，断食と祈りの後で開かれる。完全な正義を貫き，主の啓示されたみ言葉と一致させることが，教会法廷の主要な目的である。軽すぎる判決も，厳しすぎる判決も，共に主の目的をそこなうことがたびたびである。審理をせずに判決が下されることはない。事実を聴聞し，その人の気持ちを確認した上で初めて，公正な正義が貫かれるのである。法廷で公正に聴聞し，最終的な判断が下される時，それがみたまの賜によって裁定される場合，審理に付されている会員にとって，それは常に最良の決定となるはずである。

罪を犯したこと以上にはるかに重要なことは，悔い改めをしようとする人の心の中に何があるかということである，と言われているがこれは真実である。本当に残念なことではあるが，重大な罪を犯した人々の中には，所属するワード部やステーキ部の神権指導者の前に出るのを避けようとする人々がいる。そのような人々は，自分のしたことに対してすまないという気持ちがあまりない。見破られたことだけをつらいと思っているだけである。キンボール大管長の言葉を借りて言えば，「強いられることなくへりくだる人々は，幸いである。」

教会から破門されたからと言って，希望が全くないということではない。犯した過ちが神の戒めに対する重大な違背であったとしても，本当に主を愛し，神権指導者に自分の身をゆだねたいという希望と不屈の精神を持っている人なら，自分の生活を立て直し，適切な過程を踏んだ上で，昇栄を含む気高い永遠の祝福が受けられるよう，その資格を取り戻すこともできるはずである。どんなに重大な罪を犯した人であろうと，主は喜んで迎え入れて下さるのである。「たといあなたがたの罪は緋のようであっても，雪のように白くなるのだ。」（イザヤ1：18）なんと大いなる約束であり，なんと大いなる贖いであろうか。だがこれとて，完全な悔い改めがなかったら起こりえない。完全な悔い改めとは，前に述べた通りのことであって，罪を告白し，捨てるということである。

破門の原因

この教会では，破門となる条件は極めて少ない。私は3つほど考えつくだけである。それを挙げてみよう。まず第一に，教会員は，重大な罪を犯した場合に破門の対象になり得る。第二に，教会員は，多妻結婚を実施したり唱道したりした場合，破門の対象となる。今日，教会にその種の教義が入り込むすきはない。第三に，教会員は，教会の教えから背教した場合，破門の対象となる。

では，いわゆる重大な罪とは一体なんであろうか。私の考えでは，重大な罪とは，殺人，姦淫，性的倒錯，あるいは，国の法廷で有罪の判決が下されるような，社会に対する重大な違背行為などがこれに含まれる罪ではないかと思う。

背教ということについて明確にしておきたい。背教者というのは，無関心な教会員や不活発な教会員のことを指すのではなく，むしろ教会の神聖な由来をきっぱりと否定する人々や，神権の権能を認めようとしなかったり，またそれに対して敵対したりする人々のことを指しているということである。私たちは，無関心とか不活発とかいう理由で，この教会から人を破門することはない。私の知る限りで最も不幸だと思われる人々の中に，自分の根本的な信念とは相反する気持をもって生活しようとしている教会員がいる。そのような人々は，主を愛しながら，自分は主を裏切っていると感じている。これでは決して気持ちが安定するわけがない。これを未解決のまま放っておくと，葛藤しているうちに，正当化を始めてしまう。サタンは，偽った安心感を与えて私たちを欺こうとしている。もしも私たちが自分を変えずに物事を正当化しようとするなら，自分にうそをつくことになる。このようにして悪魔は，不幸と後悔の生涯へと徐々に私たちを陥れていくのである。

私は，ある囚人と話をした時のことを覚えている。この囚人は，自分が囚人の身であることをひどく嘆いていた。私は彼に悔い改めということを話して聞かせ，彼が何の罪で監獄に入っているか知らぬまま，こう尋ねた。「兄弟，あなたは盗みをしたために捕まったんですか。」

「いや，違います。私は母親から盗みはしないように教えられました。私はだれからも，何も盗んじゃいません。私がここにいるのは，文書偽造のためなんですよ。」正当化というものは，随分と妙な気を起こさせるものである。

これまで，問題解決のための偉大な概念とその簡潔な方法について話してきた。ヤコブは，助けを必要としている人々に次のように言っている。「そういうわけだから，神に従いなさい。そして，悪魔に立ちむかいなさい。そうすれば，彼はあなたがたから逃げ去るであろう。」（ヤコブ4：7）私はこの聖句を信ずる。その事例を幾度となく見ているからである。監督は，神の代弁者となるよう聖任されている。だから，神に従うと決心した以上は，神権指導者にも従わなければならない。主が，主の声で語られようと，主の僕らの声で語られようと同じであると言われたからである。そして，事実そうである。

自制の必要性

自分の永遠の行く末を自分で調整していけるだけの勇気を持って欲しい。近道はない。昇栄と永遠の生命に至る近道は全くないのである。キンボール大管長は，その偉大な著書「赦しの奇跡」の中で，次のような文を引用している。

「人の成功の度合は，その自制によって測られる。人の失敗の度合は，どれだけ自分を放棄したかによって測られる。どちらの側にも限度はない。この法則は，永遠の正義を言い表わした法則である。自分を治めることのできない人は，他人を治めることなどできない。自分を治めることのできる人こそ，王となるのである。」（作者不詳）

神があなた方を教会員として信頼しいずれは数々の責任を託してその管理を委ねられるということを，今まで考えたことがあるだろうか。これは信じ

ておいた方がよい。自制ということが大切ではないだろうか。自制心が持てなかったら，今述べたようなことが起こるわけがない。人が，支配し，主権を持ち，権能を持つためには，まず自分自身を治め，自分自身の感情や衝動を支配できなければならない。なぜ今すぐしないのだろうか。引き延ばしは，正当化の言い訳を生む。次のような皮肉を言ったのは，マーク・トウェインであった。「私はいつでも禁煙できる。今までだって何回も禁煙したんだから。」私たちも同じように，「すぐにでも，そんな習慣を変えることはできるよ。必要な時が来れば，やめられるよ」と言ってはいないだろうか。時間と場所が定まれば魔法のカーテンでも現われてきて，そのカーテンをくぐり抜ければ自動的に過去の悪習やおよそ自慢の種にならないようなことを捨て去ることができると考えている人もいる。だが，そんな考えは幻想でしかない。間違っている。悪魔の教えなのである。

次にタゴールの言葉から引用してみよう。「私は，歌おうと思った歌を十分に歌い込まないで，楽器の弦を張ったりはずしたりして日々を過ごしていた。」私たちは，毎日同じことを繰り返している。そして，つまらない事のために時を費やし，主から予任された時に託された務めを果たさずにいるのである。

他の人々を強める

ここで再び無私の動機ということを取り上げるにあたり，一言述べたいことがある。人生で自分の過ちを修正することも，重要で極めて満足感をもたらすものであるが，それと同様に，最も興味深くまた満足感をもたらすことは，自分自身の弱さを克服した後に，同じような境遇にある人々を助けることによって，一層の強さが増し加えられる可能性があるということである。これこそイエス・キリストの福音の真髄である。救い主が次のように語っておられるからである。「隣り人を愛し」（マタイ5：43）「わたしの羊を飼いなさい。」（ヨハネ21：16）「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは，すなわち，わたしにしたのである。」（マタイ25：40）

ルカは，救い主がペテロに言われた言葉を次のように記録している。「シモン，シモン，見よ，サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された。しかし，わたしはあなたの信仰がなくならないように，あなたのために祈った。それで，あなたが立ち直ったときには，兄弟たちを力づけてやりなさい。」（ルカ22：31－32）あなたが立ち直った時には，兄弟たちを力づけてやりなさい。そうすることにより，私の知る限り，この世の生涯で最も心の満足が得られる喜びにあずかることができるのである。教会の社会奉仕活動の主任をしていた頃，私は何千何万というボランティアたちが黙々と働くのを目にした。彼らはアルコール中毒者たちを救い，麻薬常習者を助け，さらに未婚の母親のためにはその生活が再建できるよう準備してあげ，また囚人たちが更生できるよう，たびたび一緒に時を過ごしたりして，援助の手を差し伸べていたのである。

私たちに与えられている責任も，これと大差ない。「あなたが立ち直ったときには，兄弟たちを力づけてやりなさい」という言葉は，シモン・ペテロに対して言われた言葉ではあるが，私たちに対しても同様の拘束力を持っている。私たちが悔い改めたとき，主の言われた通りに他の人々を助けることができたら，私たちは二重の勝利を味わうのである。私たち自身の勝利ともなり，また，私たちが強められたあとで引き上げてあげた人々の勝利ともなるからである。ここで再度，積極的かつ無私の行為の重要性を強調しておきたい。私たちが今一生懸命努力していることの，究極的に行き着く先が，それだからである。

昇栄にあずかる

若人の諸君，主はあなた方を愛しておられる。天父があなた方を責めるような原則を与えられたことは，ひとつたりともない。破門でさえ，暫定的なものであって，一層輝かしい未来を作り出すことさえ可能なのである。主のみ業は，そして主の栄光は，人に昇栄を得させることである。もうひとつ，とりわけ学生諸君にとって，励みになることを申し上げておこう。それは，神は難問によってその人を評価するようなことはされないということである。神は私たちが皆「優」をとることを望んでおられる。そして神が，ひとり残らず「優」がとれるように準備をして下さったのであるが，その資格があることを証明するのは私たちの責任である。不幸と破壊を招くサタンの計画には決して参画してはならない。決してそのようなことをしてはならない。主が定められた清めの過程を十分に活用するようにしていただきたい。心を常に主に向けておいていただきたい。心を常に主に向けていれば，次のような祝福を受けることができる。すなわち，神権の教理は天より下る露のごとくにあなたたちをうるおすのである。

また聖霊は常にあなた方の伴侶となり，あなた方の笏は真理と正義の変わることのない笏となり，あなた方の支配は永遠の支配となって，強いられることなく永遠にあなた方に流れ込むのである。（教義と聖約121：44－46参照）

これこそ，この教会の業のすべてである。私はあなた方に厳粛な思いで証を申し上げたいと思う。私は神が生きておられることを知っている。また，イエス・キリストが神の御子であることを知っている。さらにまた，教会で聖任を受けた神権役員たちが，善良な人々であり，天父の僕であって，自己の利益をかえりみずにみ業のために献身している人々であることを知っている。この人々の働きがあればこそ，私たちは正しい導きを受け，重荷を主にゆだねることもでき，また，あの偉大なる永遠の目標のために，男も女も家族も，神権の権能に導かれて，ふさわしい資格を備えることができるのである。

愛は理解し，助けること

セオ・E・マキーン

ある日の真夜中，私たちはかかりつけの医師と一緒にほとんど徹夜で，はあはあと苦しそうに呼吸をしている幼い息子を見守っていた。長い時間だったが，その甲斐はあった。大事な子供の命を救うのに立派な医師の専門的な助力があったのはもちろんであるが，私たちはその上彼から，奉仕のために自分の命を捨てることも辞さない人間理解というものを知らされたのであった。

静寂を破ってこう尋ねたのは妻だった。「先生，私たちにこんなにして下さって，医療費を一度も請求なさらないのはなぜですか，お聞かせ下さい。」

一時の沈黙があり，思いを昔にはせていることがわかった。それから先生は悲しげな影をうっすらと顔に浮かべて，次のような話を聞かせて下さった。

「私がまだ生まれる前，両親はドイツからアメリカに移民して来ました。生活はとても大変で，成長する子供たちのために両親は懸命に働きました。

ジフテリヤが流行した時に，私と妹が重病になりました。来てくれた医師はひとり分しか薬を持っていないというので，どちらかひとりに決めなければなりませんでした。

どういうことでか，私が薬をもらって助かりました。その後数日で，妹は死にました。

父が妹を小さな木の棺に入れたのを今でも覚えています。近所の人たちは来ても窓越しにのぞくだけでした。家族で隔離されており，それにだれもが伝染を極度に恐れたからです。

父は小さかった私を，荒削りの小さな棺の上に抱え上げて，この世の別れに遊び仲間の妹の顔を見せてくれました。それから父は外に出て，馬車の腰掛けに上がり，棺をそっと持ち上げて自分の膝に乗せ，たったひとりで近所の共同墓地に向かいました。

その後何年もたってから，私が医者の仕事を始めて1ヵ月過ぎた時のことです。看護婦が患者さんたちに請求書を書いていました。机に向かっている患者さんたちを見ていると，子供の時の記憶がよみがえってきました。両親が後に，医者にじゃがいもやその他の野菜で支払いをしていたことが思い出されました。それまでもよく考えたものですが，『妹でなくて自分が助かったのはなぜだろう』と，その時に考えました。そしてその言葉がまだ口に残るうちに，請求書の束をつかんでくず入れに放って，看護婦に，人のためになる仕事をしよう，払いたい人は払えばいいが，患者さんに請求するのはやめにしようと言いました。」

先生の話が終った後沈黙が続いた。私たちはつくづく考えていた。自分のことを二の次にして奉仕をしている人を目の前にして，心を洗われる思いだった。

救い主は自ら進んで友のために御自分の命を捨てただけでなく，生きている間も人々への奉仕に身を捧げられた。私たちは，救い主と同じような奉仕をしている人とその夜を過ごした。体を治してもらった上に，また霊的にも，あの素晴らしい教師である友から愛され，理解され，教えと励ましを受け，養われたのである。

生徒を知る

医師が薬の効能と同時に患者の容態をよく知らなければならないように，教師は福音を知ると同時に生徒をよく知らなければならない。(1977年4月号 p. 240，本シリーズの第1部「福音の教授と学習」の図を参照)

生徒たちは，「先生がどれだけ僕のことを知っているかなんてどうでもいい。僕のことを心に掛けてくれていることがわかればいい」と，私たちに向かって言うかもしれない。心に掛ける教師は，助けたいと真心から思う教師である。彼は，生徒に何が必要であろうかと，一人一人の生徒を心底愛し，理解しなければ助けることなどできないことを知っている。

愛の特質

教室や家，その他どんな場所であっても，教師と生徒の関係には，次の聖句で主が述べておられるような気持と接し方がなければならない。

「如何なる権力も勢力も，神権によりて維持する能わず，または維持すべきものにあらず，ただ説服と堅忍と柔和と温情と偽らざる愛とによる。

また親切と浄き知識すなわち偽善にあらず奸智にあらずしてその人を甚だ大いならしむるものによる。

すなわち，聖霊に感動しては機に臨みて激しく人を責む。然る後，また彼の汝を敵視せざらんために責めたるその人に一層の愛を示す。

かくて，彼は汝の誠実は死のきずなよりも強きことを知るべし。」(教義と聖約121：41－44)

私たちの気持ちと接し方を今述べた勧告と比べてみれば，私たちが生徒にどんな愛を抱いているかがわかると思う。

愛の力

ジョセフ・F・スミス大管長はこの尊い愛について，力強い言葉を述べている。

「子供に学ばせ，進歩させ，何かを達成させようと心に訴える最も力強い影響力は愛の力であることを御存知であろう。いつわらざる愛はいかなる影響力よりも子供を善に導くことができる。むちで征服したり，暴力で従わせたりすることのできない子供もいつわらざる愛とあわれみによるならばたちどころに導くことができる。私はこれが真実であり，この原則は人生のあらゆる所で用いることができることを知っている。」(*Conference Report*「大会報告」1902年10月，p. 92；「福音の教義」第2巻 p. 28)

この同じ大会で，日曜学校中央管理会のヘンリー・ピーターソン兄弟はさらにこう語った。

「スミス大管長は説教の中で，すべての教師が持つべき大切な特質，すなわち生徒を愛する愛の精神についてお話された。その素晴らしい特質を持つ教師は恐らく自分の仕事を成功させるに必要な他の特質もすべて身につけることであろう。愛は，保護下に置かれた子供たちに恵みを得させたいという願いを持たせる。教師は子供たちの欲求を調

べ，必要な霊の糧がクラスの子供たちに与えられるよう自らを備える。

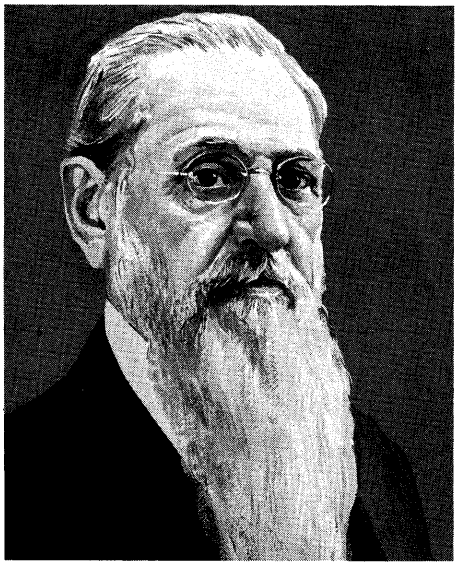
生徒への愛に満ちた教師は，福音を愛するようになる。それは福音によって子供たちを霊的な生活に導き，救い主に近づけることができるからである。このような教師は聖典の勉強を喜びとし，その喜びを人々に教える。授業は生き生きとして，生徒は，いつも出席したいと思う。

生徒を愛する教師は，生徒の役に立つ者となれるように，主に助けを求める。……

教師に召されたすべての人の心に愛が満ちるならば，人は彼らにあれこれ言う必要はない。愛の気持がほかの必要な準備をさせ，神のみたまが彼らを道具として，自然で有益な方法へと彼らの仕事を導くであろう。彼らは断片的な宗教や歴史の事実を機械的に詰め込むのではなく，霊的な生活を送るために必要な日々の糧を生徒に与えることであろう。」（*Conference Report*「大会報告」1902年10月，p. 94）

自分を知る

では教師は，どのように愛と理解を深めればよいのだろうか。ボイド・K・パッカー長老は次のように言っている。「生徒のことが知りたければ，まず自分のことをとことん知りなさい。」（*Teach ye Diligently*「熱心に教えよ」p. 85）



「子供に学ばせ，進歩させ，何かを達成させようと心に訴える最も力強い影響力は愛の力であることを御存知であろう。いつわらざる愛はいかなる影響力よりも子供を善に導くことができる。むちで征服したり，暴力で従わせたりすることのできない子供もいつわらざる愛とあわれみによるならばたちどころに導くことができる。私はこれが真実であり，この原則は人生のあらゆる所で用いることができることを知っている」

愛を深める

モルモン経の中で，イノスは全人類に対して大きな理解と愛を得るに至った次第について語っている。

次の出来事を考えてみていただきたい。

まず，イノスは心に大きな願いを持った。「自分の心が飢えるのを覚えて」（4節）と言っている。このように深い飢餓感を覚えたイノスは，自分自身のことが気になり，ひざまずいて祈ることにした。

「私の造り主の御前にひざまずき，自分の身と霊のために一心こめて祈りかつ願った。私は本当に一日中神に祈り，夜になってもまだ私の声が天にとどくほど大きな声で祈った。」（4節）

主はイノスの祈りに答え，罪の赦されたことを告げ，「されば，汝努めよ。汝は己が信仰によりて無罪となり」（8節）と言われた。

すると，イノスは次に人々のことに心を向け始めた。彼はこのように言っている。「私はこの言葉を聞くと，私の兄弟であるニーファイ人の幸福を望む思いが心の中に生じたから，**かれらのために全身全霊を傾けて神に祈った。**」（9節）

すると主が再び答えられ，イノスの愛と関心はさらに増した。

「この言葉を聞いて私イノスは主を信ずる信仰がいよいよ固くなり，**私の兄弟レーマン人のためにたびたび長い間一心不乱に主に祈った。**」（11節）

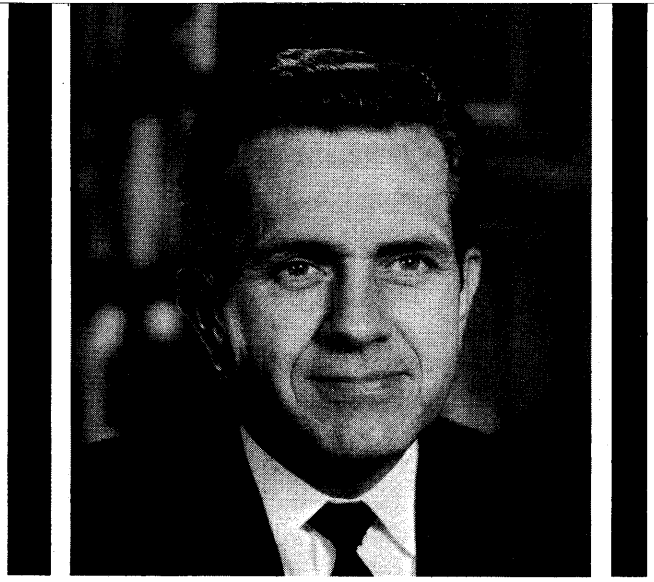
イノスのそのような霊的成長が一貫しておりまた純粋であったため，当時敵であった人々にもその愛と関心が及んだ。彼は終りにこう書いている。

「私がこのように祈って心の力を尽したから，主は私に『汝の信仰のために，われは汝の願うところを聞きとどくべし』と仰せになった。」（12節）

これは何と力強い模範であろう。

まず自分のことから始めよう。自分が罪なしとなるように一心に努めようではないか。「この愛で自分たちの胸を満たすためにありたけの心をつくして」（モロナイ7：48）同じように義を渇望している生徒たちに対する自分の愛と理解が深まるであろう。

すると，それを続けるうちに，反抗的で心をとらえにくい生徒に対して，同情と理解と偽らざる愛が育つであろう。このような生徒たちも心底は飢え，渇く者であり，旅人であり，裸であり，病人であり，獄にいるのである（マタイ25：35－36参照）。彼らは私たちの理解と愛と助けを欲している。救い主は，「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは，すなわち，わたしにしたのである」（マタイ25：40）と言っておられる。また，「わたしのいましめは，これである。わたしがあなたがたを愛したように，あなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネ15：12）とも言っておられるのである。



生徒を理解する

ボイド・K・パッカー著
「汝ら熱心に教えよ」より

世界の教会の多くは，性悪説に基づいた教義を教えている。人は肉欲的であって，悪魔のような性質を持ち，罪を犯すべく生まれついていて，また，悪い行ないをする性癖を持っているというのである。この教義に立つと，人の堕落した，凶悪な性質は，打破されなければならないということになる。また，慈悲の手が差し伸べられることによって，人はその凶悪で肉欲的で卑しい状態から，折に触れて引き上げられるということになる。つまり簡単に言うと，人には生まれながらにして悪い行ないをする性癖があるという教えである。

これは，偽りの教えである。こうした教えはとうてい受け入れられるものではないが，それでもなお，教師として成功することが可能だと思っている。その教えは，偽りの教えであるだけではない。極めて破壊的な教えである。万一その教えを受け入れたら，生徒を訓練するという教師の責任も，子供を訓練するという親の責任も，全く希望のないものとなってしまうであろう。

善であって，悪ではない

神のみ言葉が啓示されており，神と私たちが親子であるという知識を持っていることは，なんと素晴らしいことであろうか。私たちが神の家族の一員なら，悪い行ないではなく，良い行ないをする性癖を受け継いでいるはずである。私たちは神の息子，娘なのである。

教師たる者は，是が非でも，人は本質的に善であるということを理解していただきたい。人には正しいことをしようとする性癖があることを知らなければならないのである。このような気高い考え方は，信仰を生み出す。そして，このような考え方を持っていると，自分の子供たちの前に立ったり，児童生徒のクラスに赴いたりして教えるとき，極めて大きな差異が生じるのである。

私は，世の中には，その基本的な行動の動機が一見して反抗的で，破壊的で，凶悪だという人もいることを，よく承知している。確かにそういう人はいる。だが，そういったことは，人の本来の性質ではないのである。私たちは，人を教える際には，自分は今神の息子，娘たちに教えているのだ，そして，この子たちも神の子供たちなら，神が今あるごとくになる可能性を秘めているのだ，ということを，絶えず心に言い聞かせる必要がある。

聖典の中には，人の堕落した状態について説いた聖句がある。人の腐敗ぶりを書いた聖句もある。だが，全体として啓示を読む時に，そのような考え方はすみに追いやられてしまう。聖典に書かれている「父」という言葉は，やはり「父」のことなのだ，という概念が，全体を貫いているからである。

何年か前，私は，もし自分が教師になるのなら，自分の人生哲学の中で，人は本質的に善であるという信念がまずもって不可欠であろうと，心に決めたことがある。私が心にそう決めた日から，事態は急速に変わり始めた。それ以来，いつでも希望があった。人がどれほど怒りっぽく，御し難く，手に負えそうもなく見えても，私は，そのような子供のどこかに，神の子たる性質の片鱗がある，そして，そこを重視すればよいのだ，ということを承知していた。

そのような基本的な愛と敬意は，教育をしようという人たちにとって不可欠である。また，子供を見つめる親にとって不可欠である。また，児童生徒を見つめる教師にとって不可欠である。時には，その信念を維持していくことが困難なこともあろうが，それでもその信念が正しいことに間違いはない。良い訓練をするために，まず第一に必要な資質は，教える対象の人々を愛することができる性格であり，人に奉仕したいという願いを持ち続けることのできる性格である。

人を皆，信頼する

数年前のある時，私はそれまでの自分のことを振り返って深く考えてみたが，その時，自分がなぜ自分のことをそんなに好きでないのか，その理由をいくつかつきとめた。その中で最も重要なことは，私が人を皆疑ってかかっていたということである。だれか人に会った時，私はいつも心の中で，「彼はどういう気なのだろう。一体何をするつもりなんだろうか」と考えていたのである。これは，私が以前に自分の信用していた人からひどい利用のされ方をした経験があるために起こったことである。以来，冷笑的な見方や裏切りから来る心の痛みが，私の中でうずいていたのである。だが，私は自分を変えることにした。あらゆる人を信頼することに決めたのである。以来，私はその決断を維持しようと，日々努めている。もしだれか信頼を受けるに足りない人がいたとしても，それはその人の責任であって，私にはそれを公にする責任はないのである。

全員が「優」

自分自身の子供も含めて，生徒というものは，こちらが期待すればするほど成長するものである。私は教師をしていた頃，生徒に会う最初の日にはいつもある決まった話をしたものである。また，伝道部に到着した新しい宣教師たちにも同じ話をした。さらにまた，私はいつも，私の周囲にいる人々にも同じ話を伝えようと心掛けている。それは，

信頼についての話である。話はだいたい次のようなものである。

私はあなたたちを十分に大人だと考えよう。あなたたちが，自分で学ぶこともできるし，何がしたいのかも十分感じとれるだけの大人だと考えよう。今のところ私は，あなたたちが一体どういう人物なのか，どこにいたのか，何をしてきたのかなどということについては何も知らないかもしれない。だがそのようなことはあなたたち次第なのであって，今は重要ではない。私は，あなたたちを現在あるがままに受け入れ，全員に「優」の評価をしておこう。自分がそれ以下の人間であることを自分で証明することもできる。だが，とにかくそれを働きで証明する必要がある。その時点で，私は残念ながら，あなたたちがそれ以下だったことを信じよう。あなたたちに，自分の性格で何かきらいな点があったら，今こそそれを変える時機である。自分の過去に，何か霊的な面でも，その他のことでも，ひ弱さを感じたことがあるとしたら，今こそそこから新しい一歩を踏み出す時機である。

これまでこの話を聞いた人々からは，ほとんど例外なく新しい第一歩を踏み出したいという返答があった。この話は，いつも一定した効果を生み出している。また，訓練を進める上で大いに助けとなり，学習可能な環境を作り出している。

私がだれか人と新しい関係を持ち始めるとき，それが，生徒であろうと宣教師であろうと，あるいは同僚であろうと，監督下にある人々であろうと，この信用と信頼を基盤に始めることにしている。以来私は，はるかに幸福な日々をおくっている。もちろん，この間には，失望した時もあるし，ひどい利用のされ方をしたことも何度かある。だが私はそんなことは気にしていない。そんなふうに利用されない自分とは一体なんだろうか。そんなことをどうして一々気にしていられようか。もしそれがあらゆる人を信用するための代価だとしたら，私は喜んでそれを支払うつもりである。

私は自分が悪用されるかもしれないということに，以前ほど恐れを抱かなくなった。人から悪用されたり，信用や信頼が損なわれたりすると，時には苦痛を感ずることもある。だが，そうした心の痛みは耐えられないものではない。それは痛みでしかなく，苦悩ではないからである。私の知る限り，唯一の苦悩は，自分がうっかり他人を悪用してしまったことに気づいた時に起こるものである。それは恐ろしい苦悩である。私はそれだけは避けたいと思う。

私たちが，何か道徳的なことや精神的なことを教えているとき，子供たちが事の善悪を判断する優れた感覚を持っていることを理解する必要がある。そこに興味を集中させることができる。子供たちには，ただ知識としてだけ理解していることが数多くある。教師にとっても親にとっても，自分の教えている子供たちについて研究することは，大切なことである。年若い少年少女は，その心の中に，何が正しくて何が正しくないのかというかなりはっきりした規準を持っている。時には，それが過大視されることさえある。

私たちは，自分がだれに教えているのかよく理解しておく必要がある。私たちは彼らが前世から来たことを忘れてはならない。前世のことを十分に思い出せなくとも，相当霊的に成熟することは可能なのである。

次の文はJ・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長の話であるが，教師にとって重要と思われるものが含まれている。

「教会の青年たちは，霊的な意味で子供ではない。世の中の一般的な霊的成熟の域にかなり近づいているのである。もう一度申し上げよう。あなたたちの部屋の扉から入って来る青少年たちは，そのほとんどが，自分が霊的な祝福を受けたことをよく知っている。また，祈りの効果を目にし，病気の人を癒す信仰の力を目撃し，霊的なものがあふれんばかりに注がれるのを見ているのである。世の人々は，全般に，このようなことは知らずにいる。あなたたちは，こうした霊的経験の豊富な青少年に対して，機嫌取りをする必要もなければ，宗教についてあたりをはばかりながらささやく必要もない。まっすぐに顔と顔とをつき合わせて話し合えばよいのである。宗教的な真理を，俗世的な事柄でおおい隠す必要もない。あるがままの真理を包み隠さず，そのまま教えればよいのである。若人たちは，あなたたちほど恐れることなく真理を受け入れてくれるかもしれない。段階的に教えたり，童話のようにして教えたり，甘やかしたり，過保護にしたり，あるいはまた，他の子供っぽい教具などを使ったりする必要は毛頭ない。そうしたものは，霊的な経験のない，あるいは，霊的にほとんど死んでいる人々に近づくために使われるものなのである。」（『教会の教科課程計画案』）

子供たちはもう知っている

私たちは，子供たちの霊的成熟の度合について，それほど重きをおいていないことが多い。特にそれが幼い子供たちの場合はなおさらである。だが，子供たちが既に知っていることもある。そういうものを教える必要はない。既に，初めから知っているからである。

ひとつの例を紹介しよう。私の家庭では，子供たちがまだ成長している間は，意識的に，まわりで動物や小鳥が飼えるような，田舎の環境の中で生活するようにしている。こうしたことを行なう大切な理由はいくつかあるが，ひとつは，日常の雑用的な責任を与えるためである。絶対に引き延ばすことができず，少なくとも毎日行なわなければならない責任を与えるためである。このことから，私たちの子供たちは，働くことを学び，互いに助け合うことを学んでいる。

ある時のこと，めんどりが納屋の飼い葉おけの下に巣を隠してしまった。その巣は娘が見つけ出した。ひながかえり，ひよこたちはピーピー鳴き始めた。娘はひよこを自分の手に取ってよく見たいと思ったが，ひよこを守っている親どりが怒って向かって来るのであった。その日の夕方，私が家に帰って来ると，娘が私の車の所まで走り寄って来て，興奮した面持ちでその日の大発見のことについて話すと，今度は，なんとかして，ひよこを手に持たせて欲しいと，しきりに頼むのである。親どりの協力を得ることはな

かなかできない相談であったが，とにかく，ようやくのことで私は両手に一杯のひよこを捕まえることができた。黒いのもいれば白いのもおり，まだ毛のないのもいればしま模様のもいた。そして，子供たちがまわりに集まり，いかにも子供らしい表現で感嘆の声を挙げていたので，私はひよこを娘の手に渡して，こう言った。

「このひよこは，大きくなったら，いい番犬になるだろうね。」娘は，けげんな表情をして，いぶかしげに私の方を見つめた。娘が私の言ったことを信じていないのは明らかだった。そこで，私は急いで前言を訂正した。「ああ，犬になんかならないんだよね。」娘がうなずいたので，私は今度は，「素敵な馬になるだろうね」と言った。娘は，おとうさんってなんにも知らないのね，と言わんばかりの表情で私を見つめた。娘は，ひよこが大きくなって犬になったり，馬になったり，象になったり，あるいはまた七面鳥になったりすることは絶対になく，必ずにわとりになることを知っていたのである。必ず親と似たものになることを知っていたのである。だからこそ，そんなことすら知らない私のことを不思議に思ったのである。

だが，わずか4歳の娘が，どうしてこの知識を得たのであろうか。私たちは娘にそのようなことを教えたことはなかった。子供たちが多くのことを知っているように，それは娘の知識の一部となっていたのである。人生の基本的で神聖な，数多くの教えを，子供たちは，まだ教えられないうちから知り，理解しているものである。

それなら，私たちが将来の永遠の来世において成長の限りを尽くした時に神々となるということを説明するのは，容易なことであろう。私たちもやはり，その親に似た者となるのである。神は，私たちを創造された時，私たちに御自分のことを父と呼ぶよう命じられたのであった。

私は，幼い子供たちが夢というものがどんなものかよく知っていることに，絶えず興味を持ってきた。夢そのものを示して見せることは，まずもって不可能なことであるし，夢とは何かを説明することも容易なことではない。だが，別に説明する必要もなさそうである。子供たちがもう知っているものと思われるからである。

教師にとって極めて重要な聖句が他にもあるので，紹介してみよう。「人は皆善悪をわきまえることを充分に教えられている。」（IIニーファイ2：5）

親も教師も，子供たちは善悪の区別ができるということを知っておく必要がある。この区別できる能力は，人生の不幸な経験の中で，ゆがめられたり，悪用されたり，あるいはおおい隠されたりすることがあるかもしれない。だが直観的に，全人類に与えられる霊的な賜の一部として，善悪をわきまえることはできるのである。

そう悟って以来，私には大きな希望が生まれた。神の子なら皆，たとえ堕落しようと，落ちぶれようと，その中には神たる性質の片鱗と善悪をわきまえることのできる感受性とを秘めていることを，理解したからである。

自分自身を知れ

生徒について知りたいと思うなら，まず自分自身のことをできるだけ多く認識することである。自分自身の反応，感情，感受性などについて深く洞察するようになると，それだけ，自分の生徒についても深く知るようになる。「自分の胸に手を当てて，よく考えてみるがいい」という表現がある。私たちがこの問いかけに従って，よく考えるようになれば，生徒のことについてもよく知るようになることであろう。自分自身のことを知って，初めてそれが可能になるのである。

ブリガム・ヤング大管長の説教の中でも，最も重要な説教のひとつは，この点について述べたものである。

「学び得る最大の教訓は，自分自身について知ることである。自分自身について知ったとき，隣人について知ることもできる。私たちが自分自身に対してどう対処したらよいのか，その細かい点まで知ったとき，隣人にどう対処したらよいかということも，わかるのである。あなた方がこの世に来たのは，これを学ぶためである。それを直ちに学ぶことはできない。また当代のあらゆる思想や哲学をもってしても，あなた方に教えることはできない。実践を積み，自分自身を知るためには，この地上に来なければならないのである。その時初めて，人は神のことについて，もっと完全な意味で学び始める。いかなる人も，多かれ少なかれ神のことを理解せずして，自分自身のことを完璧に知ることはできない。また，自分自身のことを知らずして，神のことを知ったり，理解したりすることはできない。人は自分自身のことを知らなければならない。そうでなければ，神を知ることはできないのである。」（*Discourses of Brigham Young*「ブリガム・ヤング説教集」p. 269）

自分の生徒について知る

教師たる者は，いつか，クラスの生徒に作文を書かせたり，あるテーマのもとに論文を読ませたり，書かせたりする必要がある。その上で生徒の前に立ち，生徒一人一人についてしばらくの間詳細に研究するのである。立派な教師というものは，自分の授業の内容については事前に研究しているものである。だがもっと優秀な教師は，生徒のことも研究する。熱心に，かつ詳細に研究するのである。

ふたつの事を挙げておこう。まず第一は，もし生徒に目を向け，生徒がなぜ今のように考え，行ない，感じるのか，それを熟考するならば，もっともっと多くのことを知ることができ，もっと迅速に生徒を助けるための備えができるようになるということである。第二は，生徒の特徴や行動を注意深く研究したら，キリスト教徒らしい暖かい思いやりの心が芽生えて来るということである。こうした感情は献身的な教師にさえ，生まれることは少ない。その感情は，霊感に似ている。愛の感情である。この愛を持つと，主のみ業のために一心に働こうと思うようになる。これこそ，主の羊を養うことなのである。

☆　　☆

“モルモンの光 ここにも輝く”

昨年の12月，福井県で恒例の県高校英語弁論大会が行なわれた。そこで見事第一位を獲得したのが石川豊明兄弟。その雄弁さをたたえた記事が，12月3日付日刊福井新聞に載った。石川兄弟は，毎年全国の高校生を対象として行なわれるＡＦＳ留学試験に合格し，一昨年８月に渡米して，アメリカでの一年間の留学生活を終え，翌51年帰国。弁論大会では「家族を愛しましょう」という題で弁論した。

左はその記事で，次頁は弁論内容である。

スポット

第十六回県高校英語弁論大会一位の

石川　豊明君

家族の大切さを切々と訴える

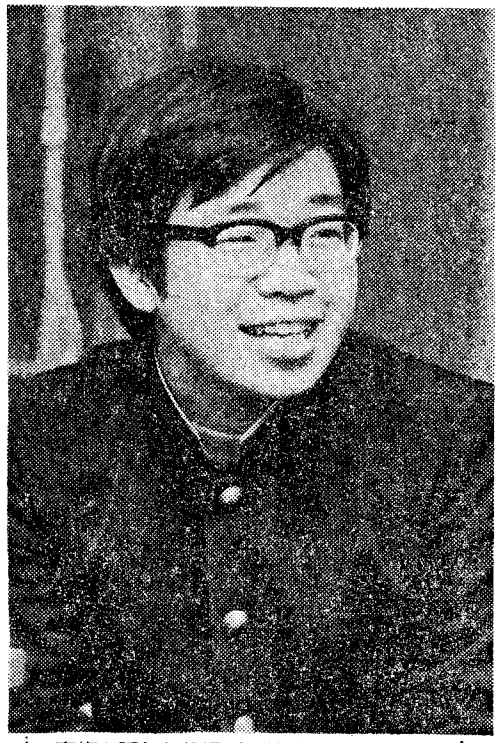
「全然、信じられなかった。僕が一位に選ばれるなんて…。やっぱりうれしい」と満面に笑みを浮かべて喜びを表す。「後で少し冷静になって、初めて、自分が弁論で言ったことがみんなにアピールした、認められたってことがわかったんです」と付け加える。なかなかのしっかり者といった印象。

現在、藤島高校二年生の十七歳。Ｅ・Ｓ・Ｓと合唱部に籍を置いて高校生活をエンジョイする傍ら、生徒会執行部を務めている。弁論大会には一年生のときも出場。惜しくも入賞にとどまったが、今回はそのうさ晴らしでもするかのように一位をかっさらった。

「英語は普通の人並みくらいかな」と謙そんするが、先生の話だとなかなかの成績らしい。昨年一年間はＡＦＳの留学生としてアメリカ・ユタ州で過ごしているというから、発音、語い、話しの滑らかさは手慣れたもの。今回は「ラブ・ユア・ファミリー」というタイトルで弁論した。家族の大切さを訴えたもの。

「今の高校生は勉強に忙しくて家族と過ごしたり話す機会が少なすぎると思う。家族同士の人格を理解し尊重することを忘れている。これから社会に出て行く僕らにとって、家族生活は社会生活への踏み石となる。だからこそ、僕たちは家族関係をまず第一に考え大切にしなければいけない。こんなことを話したんです」。内容の説明も整然と答えてくれた。

「日本の高校は受験予備校みたいになっている。アメリカではスポーツを楽しんだり、友達とのつながりを重視している。これが本当の高校生活だと思う」と現在の教育をちょっぴり批判して「これを機に、人と話すことの少ない日本人的閉鎖性を抜け出していろんな経験を積みたい」と前向きの高校生活を求めている。福井市宝永一丁目、十七歳。



家族と話したり過ごす機会が今の高校生には少ない。もっと家族同士、人格を尊重しフランクに話し合うことが大切と話す石川君

（原文の訳）

「家族を愛しましょう」

簡単な質問をして，話を始めたいと思います。皆さんは，1週間に何時間家族と一緒に過ごしているでしょうか。1週間と言ったのは，1日に1時間も家族と過ごしていない人がいるのではないかと思ったからです。「家族のみんなと話したり遊んだりする暇がなくて」という人があるかも知れません。不幸にして今日では社会一般にこの傾向があるようです。また，中には「私は家族と多くの時間をいっしょに過ごしています」と答える人もいるでしょう。しかし，本当にそれで十分だと言えるでしょうか。

私たちには家があり，家族があります。両親がいて，兄弟姉妹がいます。そして一人一人は愛によって結ばれているのです。家庭は私たちの安らぎの場です。愛と喜びに満ちた理想の場であるはずです。

けれど，家族全員が参加する話し合いや活動をしないで，本当の愛や喜びを感じることができるでしょうか。たとえば，お父さんは毎日仕事で忙しくて家に遅く帰って来る。お母さんは自分の好きな本を読むのに一生懸命，子供たちは宿題や勉強に追われているとします。そして，日曜日はみんな友達と出かけてしまう。このように，皆がそれぞれ違った方向に向いて，違ったことをしていたとしたら，家族そろって過ごす時間を取ることは可能でしょうか。一人一人が自分のことをするのに忙しすぎるのです。そして自分の家族について考える時間がないのです。けれど，友達と遊ぶ時間があるなら，なぜそれを家族と共に過ごす時間に当てようとしないのでしょう。家族の一人一人が何を考え，感じまたお互いがどれほど思いやり，愛し合っているか知りたいとは思わないのでしょうか。もし私たちがそう思い，実行したならば，家庭の不和はきっとなくなると思います。もし私たちみんなが，自分の家族に対して誇りを持ち，責任を感じるならば，より良い，より素晴らしい社会を作ることができます。逆に，もし家庭に何か問題があったりすると，勉強や仕事にも悪い影響を与えます。

私の家庭では土曜日の夜を「家庭の夕べ」に当てています。毎週順番に責任を担当し，話し合いをしたり，ゲームをしたり，クイズを解いたり，時には外食に出たりします。私たちは楽しんでこれらのことをしています。家族の一人一人がどんなことが好きなのかを知ることは本当に素晴らしいことだと思います。そしてこの「家庭の夕べ」は，家族全員の心をひとつにする良い機会を与えてくれます。

私は，ある先生が言った言葉に感銘を受けました。「かわいい子供を叱るのは時には大切です。けれど，叱った後で，子供を愛していると示すことはそれ以上に大切なことです。」両親の愛，もっと言えば家庭の愛とはそのようなものではないでしょうか。

聖書の中に，大切で，素晴らしい勧告があります。むずかしいことかも知れません，しかし，それに従うことによって私たちは確かに大きな幸福感を得ることができます。

「『心をつくし，精神をつくし，思いをつくして，主なるあなたの神を愛せよ』。これがいちばん大切な，第一のいましめである。第二もこれと同様である。『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』。」（マタイ22：37－39）

ある意味で，家族は最も大切な隣り人だと言うことができます。家族を愛さずに，どうして隣人を愛することができるでしょう。家族を愛しましょう。心から，家族に愛を示しましょう。そして，愛と喜びに満ちた素晴らしい世界をつくる第一歩をここから始めようではありませんか。

神様は不思議な方法で私たちをこの教会に導いて下さいます。その経験は私たちの思いを奮い立たせ，確かに神様は生きておられると心の中で叫ぶのです。石川豊明兄弟もそのような経験を持つひとりです。

兄弟が初めて末日聖徒イエス・キリスト教会を知ったのは高校1年生の夏でした。英会話にひかれて暫く通いましたが，夏休みが終わると同時に足も途絶えました。

その後，ＡＦＳ留学試験を受け，合格しました。この機会を通して，兄弟は教会と再会したのです。滞在する家族からの通知に，“モルモン家庭”と書いてありました。

ユタ州ソルトレーク・シティーから南へ車で約17分。ミューレイの町にあるポール・M・スミス家で一年間滞在しました。暖かい家庭の中で，石川兄弟はモルモンの生活を学びました。子供たちと参加したスカウトキャンプ，家族と出席した日曜学校，聖餐会，そして石川兄弟の胸に強く焼き付いた「家庭の夕べ」。

福音を学び，祈ることを知って，兄弟の証は強まりました。帰国後，2ヵ月して御両親の理解の下にバプテスマを受けることができました。石川兄弟はこのように証しています。

「私はアメリカでの1年を通じ本当に霊的にも成長することができたと思っています。福音を知ることができたのは最大の喜びです。そして，私を熱心に教え，導いて下さったミューレイ第5ワード部の皆さん，セミナリーの教師，友達に心から感謝しています。思えば，私がＡＦＳ生としてアメリカに留学し，モルモンを知るようになったのは，前世から決められていて，それによって私は試されたのだと思います。この機会を与えて下さった天のお父様に心から感謝しています。」

会員としての喜びを胸に

渡　辺　正　義
日本福岡伝道部
佐世保支部

神様が生きていらっしゃる。本当だろうか。当時6年生だった私には，どんなに考えても想像のつかないことでした。母や兄たちと一緒に初めて教会に行った時，求道者のクラスで，また集会のお話で，「確かに神様は生きておられます」という言葉を何回も聞きました。

私の母は，悲しい時，苦しい時に「どこかに神様がいてくれたら」と言って，何度も涙することがありました。母の涙を見るたびに，今本当に神様がいるならどんなに遠い所へでもすぐとんで行って，神様を連れて来てあげたいと思いました。父のいない私たちは，辛く悲しい毎日を過ごしていました。

ある日のことでした。そんな私たちの心を知って下さったのか，天のお父様は私の家に助け手を遣わしてくださったのです。母は〝藁をも摑む〟気持で真剣に長老のお話を聞きました。

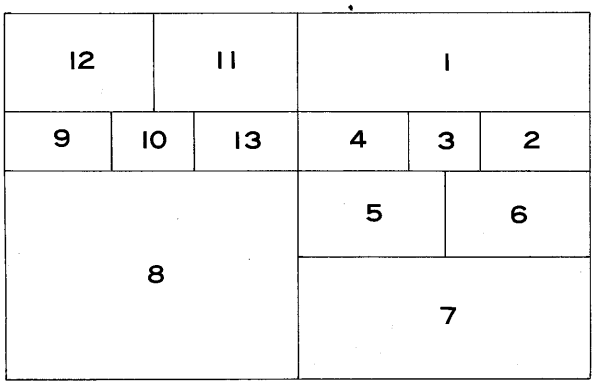
その日，私が学校から帰ると母はいつになく明るく朗らかな様子をしていました。その姿は楽しそうにさえ見えました。何か嬉しい事があったのかな，と思いましたが，母は別に何も話してくれません。兄たちが学校から帰って来て，家族で夕食をしている時でした。母は，ふたりの外人長老の訪問とモルモン経について少し話してくれました。外人の宣教師が来たのか，その時はそれ位にしか感じませんでした。

2，3日して，再び長老の訪問を受け，家庭レッスンの楽しさを知ることができました。

世の中に背を向け，暗い毎日だった家庭の中に天父の愛とみたまが満ち溢れて，日一日と明るさがよみがえってきました。聖典の一つ一つに，とっても興味を覚えるようになりました。そして，モルモン経を読んでいる時，本当に神様が生きていらっしゃることを心に感じることができました。毎日の生活の中で，神様の戒めに従ってすべてを行なう時に，善と悪を見分けることができるようになりました。自分の過ちを悔い改めることができます。友達の悪い所を見ても，愛を示し注意してあげることができます。知恵の言葉を守り，その一つ一つを真剣に行なう時，まことの平安を得ることができます。

神様は確かに生きておられます。中学2年生になった今私は，天のお父様が生きていらっしゃることを心から証することができます。私たちを優しく愛し，見守っていて下さることを知っています。バプテスマを受けて本当に良かったと思います。会員としての喜びを胸に，私は神様の教えに従って行きたいと思っています。また，私たち3人兄弟が一致して母を助け，将来は伝道に出られるように頑張りたいと思います。この教会が真実で，神様が確かに生きておられ，私たち一人一人を愛して下さっていることを証致します。イエス・キリストのみ名によって証します。アーメン。

表１，表４の写真説明



１．エルサレム市街。リーハイが悔い改めを説いた所。（Ｉニーファイ１：４）「ユダヤの王ゼデキヤの治世第一年の始めに当り……多くの予言者が現われてエルサレムの民に向い，お前たちは悔い改めなければならない，さもなければ大きな都のエルサレムは亡びてしまうにちがいないと予言した』　ソロモンの神殿は，現在石造のドームが建っている場所に建てられていた。悲しみの壁だけがヘロデの再建した神殿の跡をとどめている。今日のエルサレムは，中世の十字軍戦士の手で築かれた旧市街とその城壁をほぼ取り囲んでいる。

２．「主は……私の父に妻子をつれて荒野へ出て行けと命じたもうた。……父はまず紅海の海辺に近い国境のそばへきて」（Ｉニーファイ２：２，５）　エルサレムからアカバまでの距離は 287 キロ。学者たちは，砂漠地帯での一行の１日当たりの行程を約39キロと概算している。この計算でいくと，紅海の海辺に近い国境にたどり着くまでには少なくとも７日は要したであろう。

３．古代の井戸が多数かつての香料の街道沿いに発見されている。現在の地図の中には，平均29キロ間隔で 118 の小さな池が表示されているものもある。水は砂漠の生活に欠かせないものであり，リーハイは恐らくこの街道を利用したと思われる。

４．（Ｉニーファイ２：５－６）「それから（父リーハイは）さらに一そう紅海に近い国境にある荒野の中を進んで行った』紅海の海辺から３日間，一行はレミュエルの谷と思われるワジ・エル・アファルを旅している。ワジとは雨期以外には水のない川で，旅行者がよく利用していた。ワジ・エル・アファルは頂上から海にかけてゆるやかに傾斜し，海岸近くで高く険しい崖になっている。その長さは160キロ。

５．リーハイの時代，一般に利用されていた交通手段はらくだとろばであった。リーハイは，天幕の運搬に３頭のろばまたはらくだと，食糧として一人当たり１頭の家畜が必要だったと思われる。

６．「父は……ただ妻子と食糧と天幕のほかに何ももたずに荒野へ旅立った』（Ｉニーファイ２：４－５）　リーハイの家族が使った天幕と同じものではないかと考えられているこのベドウィン人のテントは，黒やぎの毛を使った手織りのテントで，重さはじゅうたんと同じ位，約 230 キロもある。壁，仕切り，屋根を別々に荷造りし，３頭のろばあるいはらくだで運んだに違いない。

７．リーハイの一行は，エルサレムからネホムと呼ばれる所まで南南東の方角に道をとった。ニーファイはネホムで次のように記録している。「私たちはまた荒野の中を旅して行ったが，この時からほぼ東の方へ進んで行った』（Ｉニーファイ17：１）　今日のナイランの町から北緯19度線に平行して，１本の香料の街道が半島の４分の３を占める広大な不毛の砂漠の端に沿って東に伸びている。この東方に向かう街道では，池と池の間の距離はおよそ 100 キロである。ニーファイはこの旅で多くの艱難を経験したと記している（Ｉニーファイ17：１－２）

８．リーハイの一行はネホムでしばらくの間，このようなオアシスのほとりに滞在した。イシメルはネホムで死に，彼の娘たちは荒野の中で苦難にあったために，不平を言った。

９．イシメルはネホムの近くに葬られた。このような寂寥とした墓だったであろう。

10．（Ｉニーファイ17：５－６）　「さて私たちは……果実と野密が豊にあるから，バウンテフルと名づけた土地にきた』ニーファイがバウンテフルと記述しているこの土地は，現在のオーマン・サララに類似している。サララはみつばちが多く，小ぶりのなつめやしの木にそって延々と巣箱が並んでいる光景がよく見受けられる。

11．「私たちは，天幕を海辺の近くに張った。……果実の豊にある所なのでそこをバウンテフルと名づけた』（Ｉニーファイ17：６）　サララでは，作物やうまごやしを年に10回も収穫できる。また，とうもろこし，米，キャベツ，その他多くの野菜や果物が豊かな水に恵まれて栽培されている。

12．オーマン・サララはアラビア半島の南岸で，船を造れるだけの木材がある唯一の場所である。この地に育つある種の木は非常に大きく，その幹は普通の人では抱えられないほどである。木質は強く，海水に耐え，ほとんど節がない。この木は今日でも船の建造に利用されている。

13．「われが汝の民にこの大海を渡らすため，これより示す方法に従い一隻の船をつくれ……』（Ｉニーファイ17：8）聖典には，ニーファイは人のやり方でなく主が彼に教えたもうた方法で船を造ったと記されている。ニーファイが当時の造船技術を学んでいたことは，彼が造るように命じられた船が人の方法による造船技術では造れないことを知っていたことから確かである。紅海沿岸沿いやオーマンの造船職人は今日でも，ニーファイが旅の途中学んだと思われる昔ながらの方法で船を造っている。

聖　徒　の　道

1977年7月20日発行（毎月1回20日発行）
昭和42年12月18日第3種郵便物認可